（仮）

あのね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
（仮）

【Ｎコード】
Ｎ３２８０Ａ

【作者名】
あのね

【あらすじ】
幼少の頃から病弱でその殆どの時間を病院で過ごした主人公の庭乃光樹。そんな彼は１３歳の夏、奇跡的にその病気を克服し病院を退院する事になった。病院を退院した光樹は日ごろ想いを馳せていた普通の学校生活を送れることに胸を躍らせる。しかしそんな彼に対し、兄の春斗は驚愕の言葉を発する。「おまえ、女装して学校に通え。」この言葉に押され、全ての歯車が狂いだす。

プロローグ

何処までも続く青い空、それを彩るように寄り添う雲たち、
今日は快晴、まことに素晴らしい天気である。

その青い空から視点をグルッと下げ、この物語の舞台である萌々市のとある場所。
萌々記念総合病院の大きな入り口にポツネンと二つの人影が見えた。
近付いてみると一人は白衣を着た美女。もう一人は花束を一つだけ抱えた小柄な少年であった。

「退院おめでとう光樹(みつき)くん。」

白衣の美女が万感の思いを込めた声色で少年に言った。

「・・・・あ、ありがとうございます。」

少年は恥ずかしそうにはにかみながら答えた。
彼の名前は「庭乃　光樹」（１３才）このお話の主人公である。
触り心地の良さそうなサラサラっとした黒髪、美少女に間違えられる・・・というかむしろ美少女！と断言できる容姿、
抱きしめると壊れてしまうのでは無いかと思わせるような華奢な体。
（病弱だったからね）

それらを総合しかつ客観的に見て考察した結果、彼は誰もが認めるほどの美少年であることが分かったのだ。
ショタ系な人なら胸キュン間違いない感じです。

さてその光樹少年は持っていた花束をキュッと微かに抱きしめながが

ら上目遣いに目の前の白衣の女性を見た。

白衣の女性は優しく微笑んでいた。
彼女は「藤野　美弥子」、光樹の主治医である。彼女を一言で表すなら「色気」・・・これだけで事足りる。
しっとりと結い上げまとめた紅茶色の髪に薄い黒縁メガネが知性を感じさせる完全な美形顔。
白衣越しにもハッキリとクッキリと自己主張する女性の象徴。それと見事に調和したスレンダーな体。
若干冷たそうな印象を与える風貌だが実際は柔和で知的な素晴らしい女性である。

「これから今まで出来なかった事も一杯経験できるわね。」

「はい、・・・美弥子先生。」

光樹は小さく頷き、

「今までお世話になりました。」

ぺこりとお辞儀をする。
頭を上げると少し瞳が潤んでいるのが見て取れた。

「ええ、たくさんお世話したわ。」

少しだけ意地悪そうに口元を歪める。

「・・・でも、私も同じくらいお世話になった。」

光樹と同様に瞳を潤める。

「・・・ぐすっ、・・・ごめんね。・・・いろいろ考えてたんだけど全部忘れちゃった。」

そう言うと指で涙をふき取る。

「・・・美弥子先生。」

「・・だ、ダメね。・・光樹くんの大切な始まりの時だって言うのに・・・」

両手の指で涙を拭いながら必死に泣き声をこらえる。

「みやこせんせいっ！」

感極まった光樹は花束を放り投げ涙声で美弥子に抱きつく。

彼女と光樹の出会いは七年前にさかのぼる。光樹は小学校に入学したその日、入学式の最中に倒れた。

先天的に内包していた要因で発生した心臓の疾患らしくかなりの重病だった。

それ以来、学校に行くことも出来ず、殆どの時間をこの病院で過ごしてきたのだ。

当時から光樹の担当になり、若くして有能な医者であった美弥子は心臓病の専門家であったこともあり、

必死の治療と研究を行った。その甲斐あって、ようやくその病気に関する治療法を確立し、治療を成功させたのだ。

「それにしてもみんなに挨拶しなくて良いの？」

だいぶ落ち着いた美弥子が涙を拭っている光樹に尋ねる。

「は、はい、・・・みんなには昨日お祝いして貰いましたし・・・、それに顔を合わせると、・・・僕、また泣いちゃうと思うから・・・。そんなの恥ずかしいし・・・。」

「そんな事無いわよ、光樹君。」

「・・・いえ、・・・でも・・・。」

「ふふっ、まあしょうがないわね。・・・みんなにはまた会えるしね。」

「はい。・・・会いに来ます。」

「ええ、会いに来てね。いつでも歓迎するから。」

「はい！」

嬉しそうに頷く光樹。

「悩み事とか体に違和感を感じたら遠慮なく相談してね。」

「はい、何かあったら美弥子先生に相談しますね。」

「ええ、・・・エッチな相談もＯＫよ？」

そう言って妖艶に笑う美弥子。

「な、何を言うんですかっ。・・・そ、そんなことっ、・・・・・・。」

顔を真っ赤にして俯く光樹。

「ふふふっ、冗談よ。・・・さあ、もう行きなさい光樹くん、風花ちゃん達が待ちくたびれているわ、きっと・・・。」

「あ、は、はい、・・・じゃあ、もう行きます。・・・・さようならっ！」

光樹はそう言うと元気良く駆け出していった。・・・・が、途中でこけた。

むくりと起きあがるとこちらに向き直りながらぺこりとお辞儀した。顔が真っ赤に染まっている。そしてすぐに走り出した。

「まだ回復したばかりなんだから、あまり走ったらダメよ～～！！！」

美弥子の言葉を聞いてペースを落とす。

「ふふふっ、・・・やっぱり可愛いわ。あんな何も無いところで転べるなんて・・・。」

光樹の後ろ姿を見ながら呟く。

「あ～あ、私たちの天使くんが行っちゃいましたね～。」

「あら？・・・いたの？」

美弥子の後ろから声が聞こえ、彼女が振り返る。

そこにはショートカットで童顔の看護婦いた。

「ええ、中で見てただけですけどね。恋人同士の逢瀬を邪魔するほど無粋じゃありませんよ。」

「・・・なに逝ってるの。」

「もう私たちの心を癒してくれる天使くんには会えないんですね。」

「今までは疲れたなぁと思ったらあそこに行って色々話を聞いてもらってたのに・・・。」

「・・・あ、あなたそんな事してたの？」

唖然とした表情でその看護婦を見つめる美弥子。

「・・えへへへ、結構みんなしてましたよ。・・・光樹くんは私たちの心のお医者さんですから・・・。」

「・・・あきれた。」

「それにですね。光樹くんがいなくなったと言うことは、お兄さんの春斗さんも来ないって事じゃないですか。」

「そうね。春斗くんもあまり来なくなるわね。でも取り敢えず院内学級の方には出るみたいよ？」

「でも今までは光樹君のお見舞いのついでって感じでしたからね。正規の早坂先生がいらっしゃるワケですし・・・。

ということはやはり徐々に減っていくと言うことです。それはかな

り痛いですよ。私たちの中ではファンクラブも結成されてたりするんですから」

「確かそんなのがあるって噂聞いたことがあるわ。」

「春斗さんが来てるとみんな格好良い所見せようとして仕事の効率上がるんです。そりゃあもう赤いＭＳくらい速く動きます・・・。」

「はいはい、そんな事はもう良いから仕事に戻るわよ。」

美弥子はその謎のたとえを含んだ言葉をあっさり流すとひらりと身を翻し院内に入っていく。

「あっ、ちょっと待って下さいよっ～！！！」

童顔看護婦はさっさと行ってしまった美弥子の後ろを慌てて付いていった。

第一話

パタパタパタパタっ・・・・・・・・。

（う～～、は、恥ずかしいよぉ、・・・どうしてあんな所で転んじゃうのさぁ・・・僕のバカっ！美弥子先生に笑われちゃったよぉ。）

顔を真っ赤にして病院前の歩道に出てきた光樹。

（こ、これからは絶対に転ばないようにしなくちゃ・・・って、そうだっ、それより春お兄ちゃんを探さないと・・。）

そう思い、辺りを見回す。
すると５０メートル先くらいに黒い乗用車が止まっていた。

（あっ、アレだっ！・・・春お兄ちゃん窓から手を出してるし、風ちゃんがコッチ見てる。）

光樹は目標を定めると、大地に足を確実に踏み込みながら歩き出した。

（な、何か近付いて行くところをジッと見られると恥ずかしいなぁ・・・（赤））

自分の方を見てニコニコ微笑み手を振っている女の子を見て光樹はそう思うと、
控えめに手を振った後、顔を俯かせた。

「おう、・・・挨拶は終わったのか？」

「う、うん、終わったよ。・・・待たせて御免なさい。」

春お兄ちゃんが窓から顔を出して聞いてくる。僕は勿論頷いた。
転んだことは恥ずかしいから内緒にしておく。

「いや、そんなに待ってないさ。」

春お兄ちゃんはそう言って爽やかに笑った。

「お兄ちゃん早く乗ってよぉっ！・・・ハルなんかどうでも良いからっ！」

後部座席のドアを素早く開けてずいずいと僕の手を引っ張っていく風ちゃん。

「う、うん、今乗るから・・・。」

僕は風ちゃんによってあっという間に車の中に引きずり込まれちゃう。
ドアが閉められ、車のエンジンが音を立てる。

「・・・風花、・・・後でおぼえておけよっ。（ニヤリ）」

自分のことをどうでも良い呼ばわりされた春お兄ちゃんがバックミ

ラー越しにうっすらと笑った。
風ちゃんは全く気にしてないようで、僕の腕を抱きしめて幸せそうに笑っている。
お陰で益々険しくなっていくお兄ちゃんの顔。僕はそれを見て表情を強張らせる。

「フッ、まあ良い。・・・家に帰るぞ。」

僕の顔をちらっと見た後にすぐにそう言って優しい笑顔に戻る春お兄ちゃん。
それと同時に車が前に進み出した。

僕の家族は僕を入れて全部で四人。
春お兄ちゃんとユリお姉ちゃん、そして僕と妹の風ちゃんの四人。
お父さんとお母さんは僕が１０歳の時に事故で死んじゃった。
それ以来、僕たちは四人で暮らしている。家はお父さんが建てた家。
あまり詳しいことは分からないけどお金とかはそれなりにあるみたい。
春お兄ちゃんは今、学校の先生をやっててそれで僕たちを養ってくれている。

僕のせいでたくさんお金が掛かっちゃって凄く申し訳ないんだけど、
お兄ちゃんは

「そんな事気にするな。俺はお前達がいてくれるから働けるんだ。」
って言って僕の頭を撫でてくれたんだ。・・やっぱりちょっと申し訳なかったけど、凄く嬉しかった。
春お兄ちゃんは春斗って言うんだけど庭乃家の長男で一家の大黒柱なんだ。
とにかく僕たちの為に一生懸命働いてくれてる。さっきも言ったけど学校の先生をやってるんだ。
それに週何回か放課後に僕が入院していた萌々病院で院内学級の先生もやってくれてるんだよ。
院内学級って言うのは長期入院なんかが理由で学校に行けない子供のために病院内で授業をする事。
お兄ちゃん以外にいつも僕たちに勉強を教えてくれている早坂あかね先生っていう人もいる。

春お兄ちゃんは男の子の僕から見ても凄く格好いい。背が高いし性格も優しいし・・・、
でもちょっと変わった性格をしてるんだけどね。何か凄く子供みたいな所があって
イタズラとか人をからかったりするのが大好きなんだ。でも別にいつもしてるわけじゃないよ?
本当に嫌がることは絶対にしないし・・・。それに僕たちをいつも凄く優しい目で見てくれているんだ。
子供みたいだけど本当に優しい人、僕は春お兄ちゃんが大好きだし、いつか春お兄ちゃんの様な大人になりたいと思ってる。

「・・・・・・ちょっとお兄ちゃんっ!!?・・・風花の話聞いてるのっ!!??」

「えっ？」

「えっ？・・じゃないのぉ！・・風花の話聞いてくれてなかったのっ！！？」

「ご、ごめんね風ちゃん・・・・ちょっと考え事してて・・・。」

「じゃあ、風花の話よりその考え事の方が大事だったのっ！？」

風ちゃんはそう言って僕の腕により一層しがみつく。

「そ、そんな事ないよ。僕は風ちゃんのこと大事に思ってるよ。」

「じゃあ、風花のこと大好き？」

そう言って僕の体に巻き付いてくる風ちゃん。

「うん、もちろん大好きだよ。」

僕はいつも通り風ちゃんの頭を撫でながら答える。

風ちゃんは毎日の様に僕にこう聞いて来るんだ。

「えへへ、・・・・風花もお兄ちゃんのこと大好きだよ。」

嬉しそうに微笑みながらそう言って僕の胸に顔を埋める風ちゃん。

風ちゃんは庭乃家の次女で僕の妹。名前は庭乃風花。小学四年生で今は１０才。

ショートカットで左右にあるはねた髪の毛の所にリボンをつけてるのが凄く可愛い。

風ちゃん自身ももちろん可愛い。それに凄く元気で明るくて一緒にいるだけで楽しくなる。
病院の中でもいつも人気者。患者さん達にお菓子とかお見舞いの果物とか一杯貰ってたし。

風ちゃんは小さい頃から僕が親代わりに面倒を見てるんだ。
お父さんとお母さんは仕事で忙しくて、あまり風ちゃんの面倒をみれなかったから、
だからその時まだ小さかった風ちゃんの世話を入院している僕がしてたんだ。
幼稚園とかに入れても良かったんだけど、ここの病院内には託児所みたいな所があったし、
僕も一人だけでいるのが寂しかったから・・・。だからそれを考えてくれた病院の偉い人が許可してくれた。
きっとお父さんとお母さんも僕が寂しいことを分かってたんだと思う。だから風ちゃんを僕に任せてくれたんだと思うんだ。
幼い風ちゃんの身の回りの世話は大変だったけど、看護婦さん達も手伝ってくれたから僕でも何とかお世話をすることが出来た。
昼間は僕がお世話をして夕方になったら家族の誰かがが迎えに来るって言う毎日が続いた。

風ちゃんが小学校に行くようになってからはそういう事は無くなったけど学校の帰りとかは必ず僕の所にお見舞いに来てくれた。
それで殆どの時間を僕と過ごしたものだから風ちゃんは僕に凄く甘えるようになっちゃったんだ。
僕は甘えて貰うの嬉しいけどね。それに風ちゃんは凄く寂しがり屋さんだから。・・・へへ、僕もだけどね。

「お兄ちゃ～ん、お兄ちゃ～ん。」

僕の胸に頬ずりしながら幸せそうに呟いている風ちゃん。

「これからはお兄ちゃんとずっと一緒に居られるんだよね？」

「うん、そうだよ。ずっと一緒だよ。」

「やった～！！！やった～！！！やった～！！！」

本当に嬉しそうな表情で声を上げている風ちゃん。
そう・・・僕は今日からあの家にまた住むことが出来る。
もう二度と出来ないと思っていた憧れの生活を送れるようになるんだ。

みんなと一緒に楽しく過ごせるんだ。

「おい、・・・ついたぞ。」

風ちゃんの声の間から春お兄ちゃんの声が届いた。
それと同時にブレーキが掛かり車が停止する。目の前には広い庭に囲まれた大きな一軒家が見えている。
ここは住宅街や街からはちょっとだけ離れている所、別に不便と言うほど遠くはないんだけどね、ほんのちょっとだから・・・。
でもなんでこんな所に住んでるかというと実は僕のお父さんて音楽家だったんだ。
それで近所の迷惑にならないようにって少し離れたところにお家を建てたんだ。

「おい、いつまでそこに突っ立ってるんだ？・・・中に入るぞ。」
僕が家を見上げていると玄関先に移動していた春お兄ちゃんがこっちを見てそう言った。
風ちゃんもいつの間にか玄関先で待ってるし。
「あ、うん、今行くね。」
僕は慌てて走り出した。

タッタッタッタッタッタッタッ・・・コテッ！

「お、お兄ちゃんっ！！！」
「アッハッハッハッハッハッハ！！！」
僕の視界が低くなったのと同時に風ちゃんの慌てた声と春お兄ちゃんのお腹のそこからの笑い声が聞こえてきた。
僕は全身の血が顔に集まってきているのを自覚した。

「た、ただいま。（真っ赤）」

茹でダコの様になってるに違いない顔を出来る限り俯かせながら僕は小さく声を出す。

家の中からは美味しそうな匂いが漂っていた。僕の声が消えてから数秒後、家の奥からトテトテと言う足音が聞こえはじめ、そしてすぐにその方向からエプロンをしておたまを持ったユリお姉ちゃんが現れた。

「おかえり光樹。」

ユリお姉ちゃんは優しい微笑みと共にそう言った。

「ただいまユリお姉ちゃん。」

僕も顔を綻ばせながら頷く。するとユリお姉ちゃんは僕の方に近付いてきた。

そしてふわりとした動作で僕を抱きしめる。玄関の段差の為に（僕の背が低いのもあるけど・・・）

お姉ちゃんの胸に顔をうずめる様な状態になる。凄く優しい柔らかさと暖かさが僕を包む。

「・・・退院おめでとう光樹。」

一拍の間をおいて優しい声でお姉ちゃんが言う。

「・・・・・・うん、ありがとう。」
僕はそう言って再びユリお姉ちゃんの胸に顔を埋めた。

ユリお姉ちゃんは庭乃家の長女、高校二年生の１７歳。
頭が凄く良くて、でもとってもホワホワってしてておっとりしてる性格なんだ。
風ちゃん見たいに一杯喋ったりはしないけどいつも微笑みを絶やさない優しいお姉ちゃん。
綺麗で長い髪の毛を途中で結んでいつも右肩に垂らしてるのがトレードマークのユリお姉ちゃんはとっても美人。
モデルさん見たいに綺麗なんだよ。病院に僕のお見舞いに来たときなんて凄い事になるんだ。
患者さんやお医者さんがお姉ちゃん見たさに僕の部屋にきたりするんだよ？
それに前お姉ちゃんに一目惚れしたお医者さんがプロポーズしてた。
お姉ちゃんは凄く困った顔して断ってたけど・・・。

「あああっっっ！？・・・・ユリ姉ぇずるいぃっ！」

そんな事を説明しながらユリお姉ちゃんに抱きしめられていたら、
後ろから風ちゃんの叫び声が響いた。

「私もやるぅっ！！」

風ちゃんはそう言って靴を脱ぐ。
お姉ちゃんは「良いわよ。」って言って僕を離す。

「お料理はもう少しで出来るから部屋に行って着替えてきてね。風花ちゃんもよ。」

お姉ちゃんはそう言うと後ろを向く。

「ああー喉渇いた。ビールでも飲むかぁ！」

春お兄ちゃんも靴を脱いで中に入る。

「光樹や風花ちゃんが来るまで我慢してね。」

「わかってるって。」

そんなやり取りをしながら二人は奥に消えていく。
二人が消えていくのを見届けた僕が目の前に視線を移すと既に準備を整えた風ちゃんが待っていた。
そして風ちゃんは何故かお姉ちゃんを真似た感じで出来るだけ優しく微笑んだ。

「おかえり・・・お兄ちゃん。」

風ちゃんの無理した微笑みが引きつっているのをみて笑いそうになったけど、

「うん、ただいま風ちゃん。」

僕の口からは自然とその言葉が出ていた。

第二話

バタンっ！

「お腹空いたぁぁーー！！！」

大きく扉を開ける音と大きな風花の声が同時にリビングに響いた。
風花の後ろからラフな格好に着替えた光樹が出てくる。もちろん風花も可愛く変身済みだ。
あの後二人は、それぞれ自分の部屋で着替えをしに二階へ上がった。
光樹は久しぶりに入った自分の部屋を感慨深そうに見回したりし、そんな事をしている内に
風花が烏の行水の様な速さで着替えを終え、光樹部屋に侵入して彼に襲いかかったりもした。
当たり前だが、概ね平穏に着替えを終えリビングに戻り今に至る。

扉を開けた風花の視界に飛び込んできたのは、満漢全席もかくやと言うほどに豪華な夕食の品々であった。
和、洋、中、様々な料理が１０８種類と言わないまでも結構な種類が並んでいる。
テーブルの真ん中には退院祝いの大きなケーキが威風堂々として待ちかまえていた。

「うわぁぁーー！！！凄い凄い！！！・・お兄ちゃんケーキだよケーキっ！！あんなにおっきいケーキ風花初めて見たよっ！！」

そう言って雪が舞う外を走り回る犬のようにテーブルをグルグル回る風花。

「おい風花っ！走り回るなっ！・・・あぶねーだろっ！皿は落ちるし埃は舞うしで良いこと無しだぞ。」

ソファーに寝ころんでテレビを見ていた春斗が煩わしそうな声で風花に告げる。
春斗もいつの間にか着替えているようで動きやすそうなださいジャージと白いシャツという親父スタイルになっている。
容姿は端麗なのに気を抜いている格好だ。・・・でも元がいいのでなんか様になってる。
ユリはキッチンで料理の最終調整に入っていた。光樹はそれを見て手伝いに向かう。

「なによー！」

春斗に怒られるのは癪に障るらしくちょっとご立腹気味の風花。

「そうよ風花ちゃん。・・折角の料理が落ちてしまったらお姉ちゃんとても悲しいし、
お料理が食べられなくなったら風花ちゃんも悲しいんじゃない？」

春斗に少しだけ加勢するユリ。

「うん、そうだね。・・・ごめんなさいユリ姉。」

もの凄く素直に謝る風花。わざわざユリに向けてペコリと頭を下げる。
それを見てニッコリと微笑み、最後の料理の仕上げに戻るユリ。

「おい、お前ユリに対する態度と俺に対する態度が違いすぎだぞ。」

「当り前よ！ハルとユリ姉じゃあ桁・・っていうか格が違うのよっ！」

ズビシっ！と言い放つ風花。

「ちょ、ちょっと風ちゃん・・・・。」

その余りにも余りにな言いように光樹が声を上げる。

「はいはい、そうですか。」

やけにあっさりと引き下がる春斗。普段ならもう少し反撃を試みるのだが・・・。

「要するに風花はもう小遣いはいらないと言うことだな？（ニヤリ）」

「なっ！」

どうやら既に反撃は始まっていたらしい。

「いやぁ俺みたいな格の低い人間が風花さまにお小遣いを差し上げるなんて畏れ多くて・・・ああ畏れ多くて。」

無駄に芝居がかる春斗。

「その分、光樹に小遣いをはずむか、・・・なあ光樹？」

「えっ！？・・・・ぼ、僕っ！？」

突然話を振られて動揺する光樹。
盛りつけようとしていた唐揚げが驚き顔で皿から落ち奈落の底へ吸い込まれていった。

「あ、あの、・・ぼ、僕は・・別に・・・お小遣いとか・・・多くなくても・・・」

自分に突き刺さる子犬のような風花のウルウル光線を浴びてタジタジになる光樹。

「だ、・・だから、風ちゃんの分は風ちゃんの分で言いと思うし・・な、なんなら僕のお小遣いの分を・・
ふ、風ちゃんと半分にしたら・・・い、良いかなぁ・・なんて・・思ったりする・・・わけなんだけど・・・。」

ゆっくりとした処理速度で言葉を紡ぐ光樹。

「そうかそうか、分かったよ。・・風花、・・・光樹に感謝するんだな。」

そう言って勝ち誇った顔で風花を見る春斗。

「うわーん、・・春斗が虐めたよぉお兄ちゃ～ん」

まるでガキ大将に虐められて猫型ロボットに縋り付くメガネの少年の様に光樹に抱きつく風花。
光樹は菜箸を持ちながら困惑した表情で風花の頭を見る。

「さあ、もう出来たわよ。・・・後は此処にあるお料理を運んでお

終い。春斗も手伝ってね。」

「ああ、分かった。」

光樹と風花の横でマイペースに盛りつけをしていたユリが完成を宣言する。

春斗はテレビを消し、重力に逆らってソファーから立ち上がった。

そしてそれぞれが盛りつけられた料理を持ってテーブルに向かう。

光樹は腰にしがみついて離れない風花も連れていきながら・・・。

「良し、全員席に着いたな。」

料理が整然と整えられたテーブルを囲む四人。

風花は椅子をわざわざ移動させて光樹に密着している。・・・かなりのブラコン度である。

「じゃあ、食う前に乾杯を・・・更にその前にちょっとした挨拶を・・・。」

春斗がそう言って立ち上がる。

「ええ、本日ついに光樹が退院した。長い間、苦しい闘病生活を続けていた光樹がやっと家に帰ってきた。

今日はそんな光樹を褒めてやるのと同時にこれから改めて宜しくという意味を含んだ夜だ。みんな楽しくやろう。

特に風花はムードメーカーだ。ドンドン騒げ、今日は思いっきり許可してやる。」

「うんっ！！！」

風花は顔を綻ばせて春斗を見た。

「で、今日の主役である光樹君にも自由闊達に想いを語って貰おう。」

「えっ！？・・ぼ、僕ぅっ！？？」

またしても思わぬ所から話を振られて動揺する光樹。

パチパチパチパチ・・・

既にユリと風花は拍手をしている。

「そ、そんな、僕なにも考えてないし・・・」

「思ったことを言えば良いんだよ。・・・今の気持ちとか、これからの抱負とか。」

「・・・・思ったこと・・・・・今の気持ち・・・・・。」

全員の視線が降り注いでいるために少しだけ頬を染めながら自分の想いを感じようと目を閉じる光樹。

「お兄ちゃん頑張って。」

風花が真横でエールを送る。

「頑張って光樹。」

ユリも負けじとエールを送る。

少しの間沈黙していた光樹だが、静かに顔を上げ目を開けると視線を前に向けて小さく口を開いた。

「僕、いま本当に幸せ。・・・病院にいたときも病気の事はあったけど、みんながいてくれたから辛くても乗り越えられた。
病気が治ったのも美弥子先生や病院のみんな、春お兄ちゃんやユリお姉ちゃん、風ちゃん達のお陰だと思う。
だから僕はこれからみんなに恩返ししたいし一緒に楽しくて嬉しくて幸せな毎日を過ごしたいです。どうかこれから宜しくお願いします。」

そういって軽く頭を下げる光樹。三人は三様な反応を見せている。
春斗は俯いた光樹を静かに見つめているし、ユリは柔和に微笑んでいる。風花は光樹の隣で瞳を潤ませている。

「・・・変だったかなぁ？」

上手くまとめ切れていなかった感が自分の中であったのか、自信なさげに春斗を見る光樹。

「そんな事ないさ。」

「素敵だったわよ。」

「うん、素敵だった。さすが風花のお兄ちゃんっ！」

「・・・あ、ありがとう。（赤）」

恥ずかしそうに頬を指でなぞりながら呟く光樹。

「さあ、乾杯でもして料理を貪るかっ！」

そう言って、グラスになみなみと注いだビールを掴み取る春斗。
それぞれもジュースの入ったコップを掴む。

「それじゃあ、光樹の退院祝いとこれからの未来に・・・。」

「「「「乾杯っ！！！」」」」

「キャハハハハハハハハハっ！！！」

「アッハッハッハッハッハっ！！！」

風花の可愛らしい笑い声がリビングを満たす。すでに乾杯から数十分の時間が経過していた。

春斗も風花と一緒になって笑っていてしかもいつの間にか隣り合って座り肩を抱き合い笑っている。

結局この二人は基本的に仲が良いのだ。

「ユリお姉ちゃん、僕これからお家の手伝いとかしたい。それに料理とかも手伝いたいんだ。」

「良いわよ。・・・じゃあ、今度から色々手伝ってね。お料理も教えて上げる。」

「うん、ありがとうっ！」

光樹は嬉しそうに頷く。それを見てやはり優しげに微笑んでいるユリ。
こちらはこちらで楽しそうにやっている。
「あ、お兄ちゃんずるい～！！！風花も混ぜて～！！！」
その間に入り込もうとする風花。
春斗は新しいビールを取りに冷蔵庫へ出張中。
まだまだ楽しいひとときは続きそうである。

さらに一時間程度たった頃・・・

既にテーブルの料理は８割がた平らげられていた。四人は既に話題も尽きたのか一様に暗い顔を・・・・・

しているはずもなく今だ賑やかな笑い声や話し声が聞こえていた。

「ははは っ・・おっと、そうだそうだ・・・光樹。」

光樹と些細な話題で盛り上がっていた春斗が突然思い出したように声を上げた。

ユリと風花はケーキの美味しさとは何かというテーマを元に熱い激論を戦わせていた。（主に風花が一方的に）

「え、何？」

春斗の言葉に応える光樹。

「お前、来週から学校に行くだろ？」

「う、うん、行きたいと思ってるけど・・・・。」

ちょっと真剣な表情になった春斗を見て、少し心を波立たせる。

「・・・な、何かあったの？」

「ん？・・・いやっ、そんな事は全然ないんだ。普通に学校へは行けるぞ。」

光樹の不安そうな顔をみて、すぐに否定の言葉を出す春斗。

「ただな・・・」

しかしそこですかさず逆接。

「お前が行くはずだった萌々西中あるだろ？」

「う、うん。」

「あそこはダメになった。」

そう言って申し訳なさそうな顔をする春斗。

「どうして？」

「まあ、待て。・・・それで違う学校に行くことになったんだ。そしてその学校の名前が私立モエモエ学園。」

「モエモエ学園・・・・・・ってたしか春お兄ちゃんが勤めてる所だよね？・・・あとユリお姉ちゃんも行ってるし、風ちゃんも・・・。」

「ああ、その通りだ。俺もそこの中等部で教師をやっているし、ユリは高等部にいるし、風花は初等部だ。」

「・・・だったら僕もそこで良いよ。」

実際何の問題もなさそうな春斗の提案を素直に受ける光樹。

「そうか、そう言ってくれると助かるよ。あそこは病院からも近いし、俺やユリもいるからお前に万が一のことがあっても何とかすることが出来る。萌西にいたら病院は遠いは俺達は居ないはで大変だからなユリや風花も心配するだろうし。」

まあ、尤もな理由である。

「ただな・・・」

しかしそこですかさず逆接。

「あそこは何つーかかなり変わっている学校なんだ。私立っていっても学園長が道楽でやっている所だから授業料は安くて良いんだ。だがその学園長が変わり者でな。なんと中等部だけ女子中なんだ。」

「ふ～ん、・・・中等部だけ女子中・・・・・変わってるね・・・って女子中～～！！！」

お約束な反応を見せる光樹。

それに驚いてユリ、風花がこちらを見る。

「どうしたのお兄ちゃん。」

風花が不思議そうに言ってくる。

「な、何でもないよ風ちゃん。」

「あっ、またハルがいじめたのっ！？？」

そう言って険しい顔で春斗を睨む。

「ち、違うよ風ちゃん。」

「そうだぞ風花。・・・俺はただ光樹の中学編入についての話をしていただけだ。」

「中学編入って・・・・・・・じゃあ、あの事を？」

ユリが会話に入る。

「そうだ、あの事だ。今、光樹にそれを詳しく説明するからお前達も大人しく聞いててくれよ。」

コクコク・・・。（赤）

何故か二人は少し頬を染めながら頷いた。

「で、どこまで話したっけ？」

「え、えっと女子中だよって所まで・・・。」

「ってことは全然話してねーな。じゃあもう一度初めから行くぞ。」

「萌学は中等部だけ女子中だ。それ以外の初等部、高等部は共学な

んだがな、中等部だけ何故か男子禁制なんだ。すげ～強引な設定だけど。」

「ど、どうしてそんな変な事になってるの？」

「学園長の趣味だ。」

身も蓋もない説明である。

「何でも中学生の時期は男女を分けた方が学業や精神面での影響が良いという持論を持ってる見たいなんだ。
まあ、それは表向きの事で実際はあの年代の女生徒に囲まれていたいという欲望丸出しのスケベ根性が全てだろう事は明白だがな。
実際中等部に入り浸ってるし。」

「・・・そ、そうなんだ・・・・で、でも僕、男の子だよ？」

「そうだな。・・・立派な物も付いているだろうしな。（ニヤリ）」

「べ、別に付いてないよぉっ！（真っ赤）」

顔を真っ赤にして反応する光樹。

「なにぃ！・・・・付いてないのかっ！？」

「うぅっ・・・そ、それは・・・。（真っ赤）」

三人の視線に攻められてか細く声を上げる光樹。

「春斗、光樹が可哀相よ。」

ユリがたしなめるように言う。これでも兄と妹。因みにユリ現在１７才。
春斗は２４才なので単純に考えても歳の差は・・・・・・７だっ！！！

「ああ、すまんすまん、で、申し訳ないんだが光樹にはモエ学の中等部に入って貰う。」

「で、でも僕は男の子だから・・・」

「既に学園長には許可を貰った。・・・学園長はこう仰っていた。」

「許可しないと話が終わっちゃうから良し！！！」

「・・・とな。」

「い、意味が分からないんだけど・・・。（汗）」

「ああ、俺もだ。でもその後に書類にサインして下さったからＯＫなんだろう。」

「・・・・・・・・・・。（汗）」

「だがそこで問題が起こる。」

「光樹、・・・お前は男だ。・・・まあ、外見はどっちか分からない・・と言うかむしろ8割くらい
犬チック美少女が入っているが中身は男だ。」

「ひ、ひどいよ春お兄ちゃん・・・・僕、男の子なのに美少女って・・・・それに犬チックってなに？（潤）」

春斗の（光樹にとっては）鋭利な言葉に瞳を潤ませる光樹。

「そんな目をするところが正に犬チックなんだよ。その目で一体何人のショタ看護婦を撃沈させたと思ってるんだ。
早坂もかなりダメージを喰らってたみたいだぞ。」

「？・・・早坂先生？・・・僕なにかしたの？」

「別にそれはどうでも良い。だがそんな光樹が女子校に一人ポツネンと入って見ろ。
女子生徒の熟れた視線を一身に浴びて、その身は一週間と持たないだろう。っていうか女子校だから男子は入れないんだこれが。」

「だったらやっぱり無理なんじゃ・・・・。」

「だが・・・・・一つだけ方法があるんだ。」

急に世界を救う唯一の方法を告げるときぐらいに深刻な表情に春斗。
ユリや風花も若干頬を染めながらこの状況を固唾を飲んで見守る。

「光樹・・・・・・お前、女装して通え。」

「じょ、じょそうって・・・・・草を「それは除草だ。」

どうしても現実から目をそらしたい光樹だが春斗はそれを許さない。

「じゃ・・・じゃあ・・・お、女の子の格好を・・・す、することなの？」

幻でも見ているかのような表情で呟く光樹。

「そうだ。・・・制服を着た可愛い女の子だ。」

全然悪びれた様子もなく、むしろ誇らしげな口調で告げる春斗。

「そうすればモエ学に入ることが出来る。・・・そしてそこで楽しいスクールライフを送れっ！」

「む、無理だよっ！・・・そんなのすぐにばれるよっ！」

「大丈夫だ。お前のクラスの担任は俺だ。全て上手くやってやるさ。それに俺のクラスはみんな良い娘ばかりだから万が一ばれてもそんなに問題はないさ。まあばれないに越したことはないけどな。ははっ。」

「ははって・・・・・そんな・・・・・僕・・・。」

これからの楽しい未来の光景にひびが入り音を立てて崩れていく。

光樹の視界は今、真っ暗になっていた。

「ごめんなさい光樹。」

そんな放心状態の光樹にユリが声をかけた。

「春斗はあんな風に軽く言っているけど本当は貴方のことをとても心配しているの。それにこれは私や風花も望んだ事なの。」

「えっ？」

「だって私たちの居ないところで光樹に何かあったら大変でしょ？自分たちの居ないところで光樹にもしもの事が起こるかもしれないって思うと私や風花はとても辛いの。
それにあの学校にいってくれたらいつでも会うことが出来る、方向も同じだから一緒に学校へ行くことも出来るのよ。
私たちは今まで光樹と経験する事の出来なかったこういう生活を送ってみたいの。」

「風花、お兄ちゃんと一緒に学校行きたいっ！一緒に手を繋いで学校に行ってみたいよぉ！！！」

ユリ、風花が切実な瞳を光樹に向ける。

「・・・・・・・・・・・・・・お姉ちゃん・・・風ちゃん。」

光樹は何とも言えないような表情で二人を見る。
二人の言葉が嬉しくて、そこから導かれる光景もとても楽しそうで、でもその先に待っている光景が酷く恐ろしくも見えて、
そんな二つの映像が交互に入れ替わっている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

しかし光樹は少しだけ口を閉ざした後に三人をゆっくりと見渡し小さく微笑んで言った。

「わかった。・・・・・僕行くよ。・・・みんなが望んでる事だし僕もみんなと一緒に学校に行きたいから。」

その言葉を聞いて三人の表情が変わる。

風花は嬉しさが溢れ出さんばかりの笑顔を浮かべて光樹に飛びつく。

ユリは何故か頬をほんのりと赤く染めて微笑む。

春斗は光樹に見えないように口元の半分をつり上げてにやりと笑った。

「じゃあ、早速で悪いんだが光樹、お前の制服のサイズが合ってるかどうか試すためにコレを着てみてくれ。

もしあってなかったら明日すぐに取り替えてこないといけないからな。」

そう言って立ち上がり歩きながらリビング隅に置かれていた紙袋を手に取り中から可愛らしい制服を光樹に渡す春斗。

「・・・・・・コレ?・・・・・を・・着るの?・・・・・・・・いま?・・・・・」

現実感の伴っていなかった事実が急に現実の事実として降りかかってくる事に呆然と言葉を紡ぐ光樹。

「そうだ。いま着てくれ。着かたはユリに教えてもらえ。」

光樹の腿の上に制服を置いた春斗はその手で光樹の肩をポンポンとたたく。

「光樹、・・・・制服の着方を教えてあげる。・・・上で着替えてきましょう。」

静かな音を立てて椅子から立ち上がったユリが戸惑う光樹の手を優しく包み込み立ち上がらせて席を立つ。

「あ、で、でも、・・ぼく・・・・あ、あの・・・・」

なすがままに立ち上がり歩かされる光樹。さながら人買いに買われた幼子のようだ。

「あ、風花も行くぅ！」

椅子がひっくり返りそうな勢いで立ち上がり光樹の腕に絡みつく風花。

「え、えっと・・・ふ、風ちゃん・・・・・・ぼく・・・・・・まだ・・・その・・・」

困り顔のまま二人に連行されていく光樹。

「ね、ねぇ・・・ぼく・・・・・そんな・・・・・・き、急に・・・・・
まだ心の準備が・・・・・・お姉ちゃん・・・・風ちゃん・・聞いてよ
ぉ・・・・・」

・・・・・・・パタン・・・・・・・・・

光樹の戸惑いの声を飲み込みながら無慈悲なドアがしまりリビング
を静寂が支配した。

「頼んだぞ・・・・ユリ、風花。」

春斗は気楽な声でそういうと勢い良くビールをあおった。

そのあと、二階でドタバタとした物音が数分間聴こえ、次に風花の声がキャッキャ、キャッキャと聞こえ、
最後に階段の下りる音に変わった。そして運命の扉が開かれる。

「あー！・・・可愛い可愛いっ！・・・・お兄ちゃん可愛いよぉっ！」

まずそこから飛び出してきたのは物凄いはしゃぎようの風花だった。

「ハルぅ！凄いよぉ！・・・すごく可愛いよお兄ちゃんっ！」

ソファーに座っている春斗に近づきながら興奮した面持ちでそう告げる。

「そうか、それは楽しみだな。・・・是非とも早く見てみたいな。」

笑みを浮かべタバコをふかしてドアの奥を想像する。
ドア付近ではユリがわずかに上気した頬に手を当てながら、春斗からは見えない所に視線を向けていた。

そして・・・

「光樹、・・・・・入りましょう。」

「・・・・・・・で、でもぉ・・・（真っ赤）」

ユリの促す言葉に声すらも赤く染まっているような消え入る声を出す光樹。

「いつまでもそこにいても仕方ないでしょ？」

「だ、だって・・・・・恥ずかしいよぉ。（真っ赤）」

「大丈夫。・・・光樹はとっても可愛いわ。それに春斗は家族なんだから恥ずかしがる事なんてないのよ。」

「か、可愛いなんて・・・・それにか、家族とか、そういう問題じゃなくて・・・・」

なかなか踏ん切りがつかない様子の光樹。

そんな光樹の方に静かに忍び寄る謎の影が・・・。

「もう観念してね、お兄ちゃん♪」

「えっ？」

その影の正体は風花だった。

ユリと光樹の攻防に、痺れを切らした風花が終止符を打つ。

タタタと光樹の所に走りより、その手を掴みとるとすかさずリビングに引きずり込んだのだ。

「あああぁ、あっ・あっ・・・待ってぇ・・待ってよぉ風ちゃんっ・・お願いだよぉ。（真っ赤）」

「ダぁぁメ♪」

トコトコとリビング中央に連れて来られてしまう光樹。
春斗は次第に近づいてくる光樹を興味心身に眺めていたが、その姿を全て見届けたとき、
生涯でそれほど味わう事の無いであろう強烈な衝撃を受け、くわえていたタバコをポトリと落としてしまう。

目の前に自分の想像の枠を超えた桁違いの美少女が存在していたのだ。
綺麗なショートの黒髪をささやかに揺らし、しっとりと潤んだ瞳をこちらに向け、
恥ずかしさにか細く震えた口元に小さく手を当てたセーラー服の美少女が・・・。

「あ、・・・・あうぅ・・・・・ううぅ・・・（真っ赤）」

恥ずかしさのあまり顔を手で覆ってしまう光樹。
そのせいで可愛い顔が見れなくなったが、逆に華奢な全身を無防備な状態で晒してしまった。
初々しくも可憐なセーラー服姿が細かいところまで観察できる。抱きしめれば折れてしまいそうなほどに儚げな曲線を描く体。

しばらく呆けていた春斗だったが足の甲に物凄い暑さを感じて下を見る。
そこには自分が先ほど落としたタバコがジュっとした感じで靴下を焦がしていた。

「あっちぃ！！！」

「だ、大丈夫！？・・春お兄ちゃん！！？」

女装と視線の恥ずかしさに手で顔を覆っていた光樹だったが、
春斗の情けない悲鳴を聞いて、慌てて駆け寄った。
そして足下に落ちているタバコを拾い上げ灰皿に置くと、心配そうに春斗を見上げる。

「あ、ああ、・・・大丈夫だ。ありがとう光樹。」

「・・・うん。」

ウルウルとした瞳で自分を見上げてくる美少女にかなり戸惑う春斗。

「それにしても・・・・」

だがすぐに気を持ち直すと光樹をじっと見つめて言葉を紡ぐ。

「？・・・・・なに？・・・・・春お兄ちゃん。」

光樹は春斗の言葉に耳を傾ける。

「ただ制服を着ただけなのに、ここまで美少女に変身するとは・・・。」

「えっ？・・・・・・あっ！（真っ赤）」

その言葉を聞くとボンッと言う勢いでで顔を赤く染める光樹。

春斗の小ピンチに気を取られ、自分の格好の事を忘れていたようだ。
しかも至近距離で、見られているのである。
気付いた瞬間、慌てて振り返りその場から逃げだそうとする。
だが春斗が逃げ出す光樹の手を掴み、自分の方へ引っ張った。

「わっ」

振り返ろうとした中途半端な体勢で後ろから引っ張られた光樹は小さく声を上げ春斗の胸に倒れ込む。

「ご、ごめんなさい！・・春お兄ちゃん！！（真っ赤）」

春斗の暖かい温もりに包まれて顔を真っ赤に染める光樹。さっきから赤くなってばかりである。

「いや、俺が手を掴んだのが悪いんだ。光樹が悪いんじゃない。それよりもそんなに恥ずかしがるなよ。
そんなに俺に見られるのがイヤか？」

「そ、そんなこと無いよ！」

春斗の悲しそうな声（演技）に慌てて反応する光樹。しかも胸に抱かれているので自然と上目遣いになっている。

「・・・で、でもやっぱり恥ずかしいんだもん。」

そう言うと春斗から目をそらしモジモジとする。

（こ、これは凄いな・・相当な威力だ。・・・男の俺でさえ油断す

れば押し倒しかねないな。まあ兄弟だから問題はないが・・・・。）

大有りです。

（取り敢えず、どこをどう見ても美少女だ。これで学校の方は問題ないな。後は日頃の立ち振る舞いを・・・　。

まあ今のままでも十分可愛らしい動きが多いからそれほど問題はないか。たまに男の俺でさえグッとくる時があるからな・・・。

兄弟だから問題はないが・・・。）

ごっつ有ります。

（よし！！！・・・問題ないならいっちょやってみっか！）

ジッと光樹の顔を見て考えを巡らせていた春斗だったが、突然思考をうち切ると、戦いになるとワクワクしてくる野蛮な正義の味方、孫なにがしのようなセリフと共に胸の中で縮こまっている光樹を力強く抱擁した。地味に理性が焼き切れていたらしい。

「は、春お兄ちゃん！？（赤）」

いきなり狂ったような情熱的な抱擁を受けて驚きの声を上げる光樹。

「良く似合ってるよ・・・・・光樹。」

脳までとろけそうな甘い声で・・・・そう囁く・・・・。ユリ、風花は鳥肌全壊。

「それと・・・・・おかえり光樹。・・・・・オレの大切な・・・弟。」

とても優しい・・・・優しい声色。それと共に光樹の顎をクイッと持ち上げる。
きつく抱きしめられている華奢な体に甘く鋭い電流が流れる。

「・・・・・（潤）」

春斗の最後のセリフに既にノックアウトな光樹。瞳をトロンとさせてなすがまま・・・。
春斗もその様子を見届けると、ゆっくりとその艶やかな唇に顔を寄せた。

「ムキー！！！もう我慢できないっ！いい加減にしてよハルっ！」

ついに堪忍袋の緒が切れた風花は神速の速さで二人の間に割ってはいる。まるで格闘技のレフリーのように。
そして全身全霊をもって光樹を春斗から引き離す。

「お兄ちゃんも雰囲気に飲まれたらダメだよっ！！」

「・・・・で、でも・・・・。」

自分達は家族だし、春斗のことは嫌いじゃない。春斗が望むのだったら・・・・・。

「・・・めっ！！！」

幼児を怒る母親のような風花。

「・・・・・・・ご、ごめんなさい。」

しょぼんとした表情で謝る光樹。どっちが年上か分からなくなる光景だ。

「別に家族の軽い挨拶みたいなもんだろ。・・・気にすること無いじゃないか。光樹は俺にキスされるのがイヤか？」

「そ、そんなことないよ！」

「そんなことあるの！お兄ちゃんはハルとキスなんかしたらダメ！いくら家族でも男同士なんだから！！
どうしてもしたいなら風花がしてあげる！！！」

全身で春斗から引き離した、要するに光樹を抱きしめていた風花はそう言うと僅かに背伸びをして光樹の唇を奪った。

「んんっ！？」

一難去ってまた一難。風花の不意打ちにピキリと体を固まらせる光樹。
春斗は二人の様子を見て苦笑している。ユリはいつも通りに微笑んでいる。

数秒たったのか数分たったのか、時間の感覚が無くなってしまうような静寂の中で二人の愛の営みは続いた。
光樹も顔を真っ赤にしているが、自分からした風花も顔を真っ赤にしている。

「ぷはっ！・・・・・・・えへへ♪（赤）」

ついに唇を離した風花は照れ笑いを浮かべて光樹を見る。

「・・・・・・・（真っ赤）」

ぽ～っとした表情で風花を見返す光樹。余韻の残る唇を人差し指でさすりながら・・・。

「えへへへぇ～♪・・・・・お兄ちゃ～ん♪・・・えへへへぇ～♪・・・・・お兄ちゃ～ん♪・・・」

軟体動物の様に身をくねらせる風花。しかも熱病に冒されたようにブツブツと同じ言葉を繰り返している。

「ふふふ・・・・余程嬉しかったのね風花ちゃん。」

今まで黙って傍観していたユリが微笑みながらそう言った。

「全く・・・風花の光樹モエにも困ったモノだな。」

風花の溶け具合を見て呆れた声を出す。

「別に良いんじゃない？・・・光樹が嫌がっているワケでは無いし・・・。」

「・・・まあな。」

実際そんなに困っていなかった春斗はユリの言葉に軽く頷く。

「それよりもお前はしなくて良いのか？」

「何を・・・？」

「何をって・・・キスだよ、キス。・・分かってるくせに・・・。（ニヤリ）」

悪戯っ子の表情でユリを見る。

「・・・・・・・私は良いの。」

その表情を平然と受け流し首を横に振る。

「なんでだ？」

「・・・・・・後で・・ゆっくり・・・ね。（ニッコリ）」

そう言って慎ましやかに笑う。

「ははっ・・・流石だな。」

軽くあしらわれて苦笑を返す春斗。

「そうだ、それよりも明日、光樹の服を買ってきてくれ。」

「光樹の服？」

「ああ、やはり制服だけと言うのは辛いだろ？友達と遊びに行くときにも必要だろうし、ついでに街に出ることで訓練にもなるしな。」

「分かったわ。でも訓練と言うことは、街には女の子の格好で行くの？」

「ああ、学校は明後日からだ。あまり時間がない。女としての動作や心構えを一から教えている暇は無いだろう。
だから習うより慣れろと言うことで実戦を経験するしかない。それに何よりも楽しそうだ。」

「春斗にとってはそれが一番の理由でしょ？」

「ふふ、・・・まあ否定はしないさ。」

不適に笑う春斗。その表情は悪戯っ子のソレである。
ユリはその表情を見て、仕方ないわねと言った表情をする。
そして未だ固まっている光樹と溶けて床に飛び散っている風花に明日のことを告げた。

もちろん風花は喜びまくり、光樹は複雑な表情で春斗を見つめた。

一体どんな試練が待ち受けているやら・・・。

第二話（後書き）

春斗でやりすぎてしまってごめんなさい。

第三話

ピピッ・・・ピピッ・・・ピピッ・・・ピピッ・・・

「う、・・・・・う～～～ん。」

目覚ましの音に反応するように布団内部がモゾモゾと動く。

ピピッ・・・ピピッ・・・ピピッ・・・ピピッ・・・

音に向かい布団の膨らみが移動し、ニョキニョキっと腕が出て時計に止めを刺す。
そしてそのままガバリと布団を退けると、布団の膨らみは我らが主人公、庭乃光樹君にかわった。

「くぅ～～・・・・・もう朝か・・・・。」

目一杯身体を伸ばし、カーテンから覗く陽光を見る。
そして次に自分の横で猫のように身体をくっつけて眠っている風花を見る。

「風ちゃん、もう朝だよ。・・・・風ちゃん。」

頭を優しく撫でながら囁くように風花を起こす光樹。

「・・・・むにゅ～～～。」

だがそんな慈愛に満ちた起こし方で人が起きる筈もなく逆に更なる深い眠りへといざなっている。

「う～ん、・・・・どうしよう。」

幸せそうに頬を寄せてくる風花を困ったような嬉しいような顔でみつめる光樹。

「・・・・・とりあえず風ちゃんはまだ眠らせてあげようっと。」

光樹は今の状況に対してそう結論付けると、そろりと風花の抱擁を解き静かに布団を抜け出し、部屋を後にした。

ゆっくりと部屋のドアを閉め、リビングに向かうために階段をトコトコと下りる。

すると階段を下りるのに比例して、リビングからお腹を蠢動させる香ばしい匂いが漂ってきた。

光樹はその匂いに誘われるようにリビングの扉を開けた。

「・・・・・おう、光樹か・・・・・おはよう。」

「あ、・・・おはよう、春お兄ちゃん。」

そこにはYシャツにネクタイ、そしてダークグレイのスーツズボン着用の春斗がいた。見た感じは超美形の売れっ子ホストのようだ。

だがテーブルに座り、コーヒーを飲みながら呑気に新聞をみている

その姿はどこかおやじ臭い。

「春お兄ちゃん、どっかいくの？」

「ああ、お前の転入の準備やらなんやらで学校にな。」

「そう・・・・・・じゃあ、今日は一緒に出かけられないの？」

幾分気落ちしたような声色を出す光樹。

「ん、いやそんなに時間はかからないから昼飯時分に落ち合おうと思ってるが・・・。」

「ホントッ！」

春斗の言葉を聞いて顔を輝かせる光樹。

「ああ、本当だ。・・・つーかそんなに喜ぶなよ。照れるだろ。（赤）」

自分が来るというだけで、顔を輝かす光樹を見て気恥ずかしさからか頬を染め顔を背ける。

「へへへ、・・・・ごめん。（赤）」

光樹もそんな春斗を見て感染するように頬を染める。

「でも、・・・春お兄ちゃんが来てくれるの嬉しいから仕方ないよ。（赤）」

俯いたまま頬を染め、恥ずかしそうにそう呟く光樹。かなりの破壊力である。
そんな破壊力抜群の言葉を向けられた春斗は脆くも撃沈したかというと・・・。

「そうだな、俺も可愛い光樹の女装姿が見れるから嬉しくて仕方が無いな。（ニヤリ）」

すでに抗体は出来ていたようで、いつものような悪戯っ子の表情でそう切り返した。

「あっ！」

春斗の一言で、今日の買い物にどんな困難が含まれているのかを思い出す光樹。
あまりの衝撃で置物のように固まってしまう。

「美少女な光樹かぁ～・・・・さぞかし可愛いんだろうなぁ・・・。」

しみじみと、まるでご老体が若かりし頃の自分のやんちゃ体験を回想しているかのような目で空を見つめる。

「・・・・・・・・（赤）」

光樹は固まりながらも、春斗の言葉に反応して顔を赤くする。

「抱きしめちゃうかもなぁ～」

さらに追い討ちをかけるように春斗が呟く。

「・・・・・・・・・・（真っ赤）」

固まったまま更にトマト色になる光樹。

「昨日出来なかったアレをしちゃうかもなぁ～」

（ボンッ！（激真っ赤））

ついに臨界点を超えてしまったようで、顔からは湯気がモクモクと上がっていた。

（この辺でやめとくか）

一通り光樹で遊んだ春斗は心の中でそう呟く。

そして適当に回復呪文を唱えようとした。しかしその瞬間、

ダンダンダンダンっ！

騒々しい階段を下りる音が聞こえてきた。

そしてダダダダっと走る音に変わり、

「お兄ちゃんっ！」

その言葉と共にリビングの扉が開かれた。

「ふ、風ちゃん。」

風花の大きな声で一気に再起動を果たした光樹は驚き後ろを向く。
風花は光樹の姿を捉えると一瞬安堵した表情を浮かべる、だがすぐに酷くご立腹な様子で光樹を睨みはじめた。

「ど、どうしたの？・・・風ちゃん。」

なぜ自分が風花に睨まれるのか分からず困惑気味の光樹。
睨むといっても怖いというわけではなく頬をプクッと膨らませた逆に可愛らしさすら感じさせるモノなのだが。

「お兄ちゃん！・・・風花に内緒で勝手にいなくならないでよぉ！・・・目が覚めたらお兄ちゃんいなくて、
昨日の事が夢なんじゃないかって思って不安になって、それでそれで・・・。」

喋るごとに感情が昂ぶってきたのか瞳をウルウルとさせる風花。

「・・・・風ちゃん。」

静かにそう呟き、瞳から溢れ出した涙を手のひらでグジグジと拭き取っている風花にゆっくり近づく。

「・・・・・・・・・・・・ごめんね、・・風ちゃん。」

風花の瞳まで目線を下げると、気持ちのこもった言葉を囁く。そして優しく風花を抱きしめた。

「ばかぁ、ばかぁ、・・・お兄ちゃんのばかぁ・・・グスっ。」

光樹の言葉を聞いた風花は光樹の背中に手を回し胸に顔を押し付け

ると、さらにポロポロと泣き始めた。

それから五分ほど風花の泣き声だけがリビングを支配していたのだが、

「おまえら、そんな所で昼ドラやってないでそろそろ飯食えよ。冷めるぞ。冷めてるけど。」

いきなり自己完結している春斗が二人に新たな行動に移るよう促した。

その言葉に素直にテーブルにつく二人。風花はピタッと光樹にくっついている。

さっきの不安を解消するようにピタリと寄り添っている。

「飯食うときくらい離れろよ風花。」

そんな風花に呆れた様に注意する春斗。

「（睨）」

「すいません。」

だが風花の人斬りのような視線にあっさり負けを認める。

「あ、あの、これ春お兄ちゃんが作ったの？」

二人のやり取りを見て何とかほのぼのとした雰囲気に持っていきたい光樹はそう言って話題を提供した。

「ん、ああ、そうだぞ。朝はいつも俺が作ってる。作ってるといっても簡単なモノだけどな。」

テーブルに展開されている焼き魚やハムエッグ、サラダ、味噌汁などを見ながら春斗が言う。（納豆もあるよ）

「へぇ・・・凄いね春お兄ちゃん。でもなんで・・・・あ、」

「そう、あのパーフェクト超人のユリも朝には滅法弱いからな。」

そういって天井を見上げる。視線の先はユリの部屋である。

「誰かが起こさないと絶対に起きてこないからなアイツは・・・。」

「そう・・・・だったよね。」

「え？・・・・僕が？」

「というわけでお前、それ食ったらユリを起こして来い。」

「そうだ。お前起こしたこと無いだろう？」

「う、うん。」

「じゃあいってこい。飯もしっかり食えよ。朝食は一番大切だからな。
お前はもっと丈夫にならないといけないんだから。」

「うん。」

「良し、いい子だ。じゃあユリの事は頼んだぞ。」

「え、もういっちゃうの？」

「いや、一仕事してくるだけだ。」

「一仕事？」

「そう、一仕事。またの名を排泄行為だ。ぶっちゃけクソをしにいく。」

なんの躊躇いもなく言い放つ春斗。漢である。

「・・・・・・（赤）」

そしてその言葉に顔を赤くする光樹。

「ちょっとハルぅ！風花たちご飯食べてるのになんてこと言うのよお！！！（殺睨）」

「す、すいません風花様っ！・・すまん光樹。」

春斗は風花の殺気立った目を見てそういうと慌ててトイレに向かう。

「ううん、良い。」

光樹の言葉が全て届く前にリビングから姿を消した春斗。

「もう！・・・ハルのやつ、ほんとデリカシーないんだからっ！」

プンスカプンスカしながらご飯を口に入れていく。特にダメージを受けている様子はない。

光樹はそんな風花の様子をじっとみつめる。そして・・・。

「風ちゃん、・・・ご飯おいしいね。（ニッコリ）」

突然そういって風花に微笑みかける。

「・・・・・・・う、うん。」

キョトンとした目で光樹を見る風花。

「これからは毎日一緒に朝ご飯食べようね。（ニッコリ）」

寝起きから自分のせいで少し立腹気味だった風花にそういって柔らかく微笑みかける。

光樹の意図に気づいた風花は今までの不機嫌顔を一変させてキラキラと光がこぼれるような笑みを浮かべる。

「うんっ！毎日一緒だよっ！？・・お兄ちゃん！！！」

「うん！毎日一緒にね！」

光樹もこぼれるような微笑を返す。
あっという間に朝食は楽しいものに変わっていった。

トントン・・・・トントン・・・・・

「ユリお姉ちゃん、ユリお姉ちゃん。」

トントン・・・・・トントン・・・・・

「朝だよ、ユリお姉ちゃん。」

トントン・・・・トントン・・・・

「無理だよお兄ちゃん。ユリ姉はこんなんじゃおきないよ。」

恐る恐るユリの部屋をノックしていた光樹にそういった風花は、
慣れた様子で扉のノブを回し腕を前方に押し出した。

ガチャ・・・

カーテンが抑えきれずに漏れ出た光が照らす部屋内。
ベッド、机、洋服ダンス、最低限の家具しかない綺麗に整えられた
部屋。女の子の部屋としては随分と簡素な部屋。
だがそんな小奇麗に整えられた空間を一気に女の子らしい部屋にし

ている要因があった。
ぬいぐるみである。
「うわぁ～」
光樹が感嘆の声を上げる。

そこかしこに無数、特にベット周辺に多く可愛らしいぬいぐるみが置いてあるのだ。
特に静かな寝息をたてているユリの横には手作りと思われる光樹人形が置いてあった。

「相変わらず凄いよねユリ姉の部屋は・・・。」
「前来たときよりも増えてるみたいだね。」
「うん、毎回入るたびに増えてる様な気がするよ。」
「あ、これって・・・・もしかして僕の人形？」
ユリと一緒に幸せそうに寝ている自分と似た人形を指差して光樹が呟く。
「そうだよ、ユリ姉はいつもそのお兄ちゃん人形を抱いて寝てるんだよ。
風花もユリ姉に作って貰ったの部屋においてあるよ。」

「そ、そうなんだ・・・なんだか照れるなぁ・・・僕の人形なんて・・・。（赤）」

「ふふふ♪・・・・それよりもユリ姉を起こそう？」

「あ、そうだね。」

そう言って、目の前の小さな喧騒にピクリとも反応しないユリに手を伸ばす光樹。

「ユリお姉ちゃん、・・・朝だよ。・・・・・朝だよ・・・ユリお姉ちゃん。」

とても起きるとは思えない弱弱しくリズミカルで優しい揺れを発生させる光樹。

すやすや・・・すやすや・・・すやすや・・・

心地よいさざなみのような揺れにますます眠りを深くしている様子のユリ。

「お兄ちゃん、もっと強くしないと起きないよ。」

「そ、そう、・・・わかった。・・・・・やってみる。」

とてもとても困難な事をやり遂げようとしているかのような神妙さで頷く光樹。

それを見て悟られぬようにクスクスと笑う風花。

「ユリお姉ちゃん、起きて。・・・・ユリお姉ちゃん。」

今度は強めに揺すり、大きめの声で起こそうとする。

「うぅん・・・・んっ・・・。」

効き目があったのか、少しだけ身を捩じらせるユリ。。
覚醒の兆しを見せ始めたユリを見てここぞとばかりに言葉をつける光樹。

「朝だよユリお姉ちゃん。・・・・起きて。」

「んんぅ～・・・ぅ～～～・・・あぅ～～～」

モゾモゾと身体を動かしながら、意味不明な言葉をモニュモニュと発するユリ。
しかし徐々に覚醒してきたらしく、薄っすらと目をあけて「ぽやぁん」とした表情で光樹を見た。
女神のような容姿のユリに見つめられ少し鼓動を早くする光樹。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

じっと見つめあう二人。風花は面白そうに状況を見守っている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。（汗）」

まだ見つめあっている二人。動悸を早くしながらも光樹はかなり困惑している。

どう声をかけて良いか決めかねているようだ。

「・・・みつき？」

長い長い静寂の後にポソリと名前を呼ぶユリ。

「・・・・・・・・・・・・・う、うん。」

「・・みつき？」

「・・・・・・・・・・・・・そ、そうだよ。」

「・・ほんとに？」

「・・・・・・・・・・・・う、うん、ホントに僕だよ。」

いまだに寝ぼけているらしいユリに健気に答え続ける光樹。

「・・きて。」

そういって布団を広げ、自分の元へ来るように促す。

「・・・・・・・・・・・・う、うん。」

光樹は不思議な強制力に導かれ布団の中に入る。とても優しく甘い香りに包まれる。

ムギュ・・・

布団に入ってきた光樹を胸に抱え込むように抱きしめるユリ。
光樹は先ほどよりも強く、切なくなるほどの甘い匂いに包まれた。

「あぁ、ずるい！・・・・風花も入るぅ～～！」

二人の様子を静観していた風花は元気にそう言うと、定員オーバー気味のベットに無理矢理身体を入りこませる。
ユリと風花の間にサンドイッチのように挟まれた光樹。左右から感じる柔らかさに頬を染める。
そして今まで感じた事のない安心感や充実感に包まれる。それはすぐに燻ぶっていた眠気に引火し、
隣ですでに旅立ったユリの寝息を子守唄として、光樹の瞼は静かに幕を閉じた。

ガチャ

「おい、光樹。・・・ユリは起こせたかって・・これか。」

様子を見に来た春斗は視界に写った三つの盛り上がりを見ると、片手で顔を覆って天を仰ぎ見るように言った。

第四話

「ったく、寝起きが良くないのは分かるが、何も光樹たちを道連れにすることないだろ・・・・しかもがっちりと抱きしめて。」

「・・・・・・ご、ごめんなさい。（赤）」

珍しく動揺しているようで頬を染めながら俯いているユリ。

「ちょっとハルっ！・・・ユリ姉ぇをいじめないでよ！」

春斗が何か言うとほぼ全てに反抗してくる風花が当然のように食って掛かる。

「つーかお前らもミイラ取りがミイラになってどうすんだよ。」

「ごめんなさい。」

光樹は申し訳なさそうに謝った。

「ちょっとハルぅ！・・・お兄ちゃんまで苛めるなんて何様のつもりなの！！？・・・ああぁ！？？」

光樹が注意されると風花の怒りはますます高まり、ヤのつく職業の人でさえ涙目になるような表情で凄む。

「別に苛めてね～よ。ただ今日は用事があるんだからちゃんと起き

ろって事だ。何もないんなら一日寝てたって構わねぇよ。」
風花の凄みにさしてびびった様子のない春斗は淡々と言葉を続けた。
「な、なによ！」
「それともお前はあのまま寝続けて今日一日をふいにしたかったのか？」
「そ、そんなの！」
ちょっと旗色が悪くなった風花。言葉が上手く見つからずに表情が右往左往する。
「そんなの！・・・そんなのねぇっ！！！」
なにも言葉が見つからない。このままでは春斗に負ける。それはかなり悔しい。悔しい！・・・目の奥がジワッとしてくる。

「いや、俺の言い方が悪かったよ。俺の負けだ風花。ごめんな。・・・ごめんなユリ、光樹。」
風花の表情の変化を見ていた春斗はすかさずそう言って謝る。
ここで下手に風花を泣かせると無駄な時間を消費すると判断したようだ。
いつもなら風花が襲い掛かってくるまで怒らせたりするのだ。（笑）
「わ、わかれば良いのよ！」

風花は一気に機嫌を直し小さな胸を反らして春斗を見据える。
「私のほうこそごめんなさい春斗。」
「ごめんね春お兄ちゃん。」
風花とは対称的に申し訳なさそうに言葉を紡ぐユリと光樹。
「いやいいよ。まあそういうことで取り合えずこの話はおわり。次からは頑張れよ光樹。ユリ起こしはお前の仕事だ。」
「うん、がんばる！」
両手をギュッと握って気合いの入り様を春斗に示す光樹。
「ユリも頑張って起きろよ？」
「ええ、がんばるわ！」
光樹にならってユリも両手をギュッと握って気合いを表す。いつものユリのキャラと違うのでどこか可愛らしい。
「じゃあ、そういうことで俺は学校へ行って転入の準備をしてくる。」
「ちょっとハル！・・・風花にはなにもないわけ！？」
「なにもって？」

「がんばれってゆうやつ！」

「別に。」

「なんでよ！」

あっさりと言い切った春斗に食って掛かる風花。

「うそうそ・・・・風花は・・・・そうだな・・・・・・・・・う～ん」

腕組みをして唸りだす春斗。

「・・・・なんだ・・・・・・その・・・・・・いや・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・。」

なかなかその状態から変化しない春斗をイライラした様子で見上げる風花。

「・・・・・まてよ・・・・・・・・・・・・・・そこか・・・・・・・・・・・・・・ちがうな・・・・・・・・・・・・・・・・・・となると・・・・・・・・・・・・・・そうか！」

一転してキラキラした表情で春斗を見上げる風花。

「2だ！」

「何がよっ！！！？」

春斗のマサルさん的ボケにフーミン的ツッコミで思わず応じてしまう風花。
そんな二人を見てクスクスと笑うユリと光樹。

春斗は二人の様子を見ると風花に視線を戻し、親指をビシッと立てた。
風花はなにか乗せられているような気がしまくったが、笑いが取れたので良いやと思うことにして春斗に向けてビシッと親指を立てた。

こいつらは馬鹿兄妹ですね。

「じゃあ、俺は行くからな。合流するときは携帯に連絡入れる。」

「ええ、わかったわ。クスクス」

「いってらっしゃい、春お兄ちゃん。クスクス」

未だに笑い続けている二人。それを満足そうに見た春斗は歩き出しリビングを後にする。

「風花もじゃあな！」

消える瞬間に一度振り向き風花に言葉をかける。

「じゃあねハル！」

風花も大きな声でそう答えた。

「ユリお姉ちゃん、食器洗い終わったよぉ。」

キュキュッっと蛇口をしめ、タオルで手を拭きながら光樹が声を上げる。

「終わったよぉ！」

時間差で食器を拭き終わった風花も声を上げる。

「ありがとう光樹、風花ちゃん。」

ちょうど洗面所で顔を洗い終えたユリが言葉を返しつつリビングに

姿を現す。
時計は現在９：００を指している。
「じゃあ、そろそろ着替えましょう。」
「・・・・・う、うん、そうだ・・・・・・ね。」
「お着替えお着替え～！！！」
歯切れの悪い返事でユリの言葉に答える光樹。
それに対していたって元気な風花。朝から元気が有り余っている様子。
「お兄ちゃんどうしたの？・・・・・お腹痛いの？」
急にテンションの下がった光樹を心配そうに見上げる風花。
「う、ううん、違うよ風ちゃん。ただね、その・・・・着替えがね。」
なかなか千切れない餅のように言葉を紡ぐ。
「お着替え？・・・・・・・・・あ、そうか！・・・・・お兄ちゃん、女の子の服！？」
「う、うん。」
「やっぱり女の子の服を着るなんて嫌だよね。」
「うん、・・・・・・僕は一応男の子だからね。」

「じゃあ・・・・・・着ないの？」

少しションボリとして俯く風花。

「そんなことないよ。もう風ちゃん達と同じ学校に行くって決めたんだから。
ただちょっと気持ちが追いついてなくて、なんか恥ずかしいし。」

「そうだよね・・・・。」

「でももう大丈夫だよ、風ちゃんとお話したらなんかスッキリして決心ついちゃった。」

「ホントッ！？」

自分が役に立った事が殊の外嬉しい風花。

「うん、じゃあ早速お着替えに行こう。」

「うん！行こ行こ！」

「じゃあ行きましょう。」

「光樹にはコレを着てもらおうと思うのだけれど・・・良い？」
ユリがそう言って衣装箱から出したのは純白と言っていいほどに綺麗な白のワンピース。
とても清楚で上品な深窓の令嬢を思い起こさせるような衣装である。
「私が以前着ていた服なのだけれど・・・・。」
「うん、僕は構わないよ。」
「そう、ありがとう。じゃあまずは服を着る前に下着から。」
衣装ダンスの引き出しから袋に入った物体を取り出し、光樹に差し出す。
「下着？」
「ええ、それじゃあそのパジャマを脱いで光樹。そしてこのショーツとブラジャーをつけるの。」
「え！？・・・・しょ、しょーつ？・・・・ぶ、ブラジャー！」

「そうよ。二つとも女の子には欠かせないものよ。」

「そ、そんな・・・・・服だけで十分なんじゃ・・・・・・。」

「ダメ、女の子になりきるのなら下着も女の子のモノをつけなくちゃ・・・・。

それに女の子の服と下着はセットなのよ。下着だけ男の子とかブラジャーを着けないとかだと色々と問題があるの・・・・。

お願い、お姉ちゃんを信じて。」

「そ、そこまで言うなら・・・・・。」

ユリのお願いを聞かないなどという選択肢は永遠にありえないだろう。

「ありがとう。じゃあ着替えをお願い。」

そう言って後ろを向くユリ。

「う、うん。（赤）」

ユリが後ろへ向くのと同時にそそくさとパジャマのボタンを外し始める。

そしてあっという間にパジャマを脱ぎ去ると

「・・・・・ゴクっ（赤）」

小さくつばを飲み、トランクスに手をかける。

後ろを向いているとはいえ、振り向けば自分の全てを晒してしまう

この状態がかなり恥ずかしい様子だ。

「・・・・・・・・・・・・（えぃ！）」

だがいつまでもこうしている訳にもいかないので、意を決してスルリスルリとトランクスを脱ぎ去った。
そして神業のような早業でショーツを手に取る。

（うわ！・・・・女の子の下着ってこんなに小さいのっ！？・・・・穿ける気しないんだけど。」

プニョ～ンとした感じでショーツを伸ばしながら愕然とした表情を浮かべる光樹。
しかも余りにも愕然としすぎて我を忘れていた光樹は後半のセリフを口にしてしまっていた事に全く気づいていなかった。

「終わったの？・・・光樹？」

そしてその結果、光樹が喋ったことによって任務完了と勘違いしたユリは当り前のように振り返ってしまったのだ。

「あっ！」

上半身はパジャマ着用で下半身は防御力ゼロ。（笑）光樹君にとっては笑い事ではない展開。

「「！！！？？？」」

二人の視線は交差し、そのまま徐々に下降していく。
するとその先には当然のごとく光樹君自身がいるわけで・・・。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・。」」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・。」」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・。」」

ボンっ（真っ赤）

絶対に音が聞こえたであろう程の勢いで光樹の顔が勢い良く染まる。

「可愛いわよ。光樹。（ニッコリ）」

しばらくお待ちください。

もう少しお待ちください。

ガチャ！

「お兄ちゃんお着替え終わった～？・・・風花は終わったよぉ～。・・・・・・・・・お兄ちゃん？・・・・・ユリ姉ぇ？」

「あ、う、うん、もう終わるよ。（真っ赤）」

扉を開けた風花は顔を耳まで赤く染め上げ４割方機械化された様子で着替えに勤しむ光樹を見ていぶかしげに首を傾ける。

ちなみに風花はデニムのショートスカートに薄いピンクのブラウス。とても明るく元気な風花を引き立てており、さながら妖精のようだ。

「はい、あとはこのピンクのルージュを薄くぬればお終いよ。（ニッコリ）」

茹でダコな光樹の傍で妙にホクホクとしてご機嫌なご様子のユリ様。とても良い事があったみたいだ。

「風花ちゃんもルージュ使ってみる？」

後ろを振り返りニコリと微笑み風花に言う。

「え、良いの？」

「ええ、・・・今日はみんなでうんとお洒落して春斗を驚かせてあげましょう。」

「うんうん！！！・・・ハルのこと驚かせてやろう！！・・・ユリ姉ぇお願い！」

風花はそう言って悪戯っ子と女の子の表情を見せた。

「はい、これで終わり。何処を見ても可愛い女の子になったわ。鏡を見てみて光樹。」

ユリはそういって光樹を鏡の前にポンと置いた。

「・・・・・・・・・・・・う、うん。」

光樹は困惑しながらも目の前に鎮座している鏡に目を向ける。

「・・・あっ！？・・・・・・・・・・・・・」

するとどうだろう？

目の前には予想もしていなかった美少女が存在していた。

元々少し長めだったサラサラの黒く美しい髪。繊細で優しい性格に

比例したように美しい容姿。
華奢で儚げな雰囲気にピッタリの白のワンピース。すべてにおいて高レベル。
まさに超絶美少女天使。この状態で光樹が男だといっても誰も絶対に信じないし
仮に男だとしても万事オッケー！という人の方が圧倒的に多い。（断言）
光樹自身も一瞬見惚れ、動悸を激しくしてしまったほどだ。

「・・・こ、これが、ボク・・・・？」

恐る恐る自分の顔や身体を触ってみる。すると鏡の美少女も同じ動作をする。
徐々に現実を理解し始める光樹。

「お兄ちゃん、凄い可愛いよぉ！！・・・アイドルさんみたいだよっ！」

「そ、そんな・・・（真っ赤）」

恥ずかしそうに俯く光樹。

「そうね。でも風花ちゃんもとっても可愛くてアイドルさんみたいよ。」

「え～～・・そうかなぁ～・・えへへ～・・」

ユリにそう言われてかなり満更ではない様子の風花。
たしかに光樹と一緒の薄いピンクのルージュが風花の可愛さを倍増させていた。

そんな風花を見て優しく微笑んでいるユリ。

「じゃあ、私もお着替えするから二人はリビングで待っていてくれる？」

そう言ったユリは二人とは違いいまだパジャマ姿である。

「うんわかった！お兄ちゃん行こっ！！」

光樹をグイグイ引っ張ってドアの方に向かっていく風花。

「う、うん・・・。」

いまだ女装後遺症から回復していない光樹はぎこちない動作で部屋を後にする。

「・・・・・・・・・・・さあ、私もお着替えしなくちゃ。」

ユリはそう言うと、両の手を小さく握って気合いを示した。

どうやら光樹のやったこの仕草がえらく気に入ったらしい。

「ふふふ♪」

ニコニコしながら頬杖ついて光樹を見つめる風花。

「・・お兄ちゃん♪」

「・・なに？・・・・風ちゃん。」

「えへ♪・・・なんでもない♪」

「・・・？」

「お兄ちゃん♪」

「なに？・・・風ちゃん。」

「んふふ♪・・・何でもない♪」

「・・・？」

「お兄ちゃん？」

「なに？・・・風ちゃん？」

「くふふ♪・・・女の子になった感想はどお？」

「え、あ、う～ん・・・・なんか着慣れないモノを着ていて凄く違和感がある。・・・それにまだ実感がわかないんだ。」

「実感？」

「そう、こんな格好をしている自分が自分じゃないみたいな・・・、夢の中での出来事みたいな感じ・・・。」

人それを現実逃避と呼ぶ。

光樹的には着替え後から意識が幽体離脱したように

後頭部のちょっと上の部分にあるような感覚に陥っている。

「そっか～・・・難しいね。」

「うん。そうだね。」

風花の言葉に同調するように光樹も深く頷いた。
そんな二人の間に生まれた空白を埋めるかのようにリビングのドアが開いた。

「お待たせ。」

そう言って部屋に入ってきたのはもちろん不法侵入者ではなく、ユリだ。
薄いブルーのノースリーブに白のパンツという服装。その長身とスタイルのよさ、
そして美しい容姿が絶妙にブレンドされている事によって知的な超絶美女の様相を呈している。
さすが医者に一目ぼれされプロポーズされただけのことはある。
「うわぁ・・・・ユリお姉ちゃん・・・・・・・キレイ・・・・。」

「ホント・・・ユリ姉ぇ、スーパーモデルさんみたい・・・・・。」

光樹と風花が感嘆とした声色で呟く。
ちなみに風花はスーパーがつけば凄いと思っているだけでスーパーモデルに対しての知識はあまりない。
ただすごい美人、綺麗な人だと言いたいだけなのだ。

「・・・・・ありがとう、光樹、風花ちゃん。（ニッコリ）」

ユリは二人に向かって嬉しそうに微笑んだ。

「さあ、みんな準備が出来たから早速お買い物に行きましょう。」

「うん、行こ行こ！」

「そうだね。行こう。」

風花がはしゃぎながら立ち上がり、それに続いて光樹も静かに立ち上がる。

そして三人はリビングを後にし、庭乃家は光樹たちにかわって時計の音だけが響く静寂が支配した。

第五話

ガチャガチャ・・・

「はい、これで戸締りは良しと・・・。」

玄関のドアもとに立って鍵をかけているユリ。

「さあ、行きましょう。（ニッコリ）

振り返り、目の前で準備万端で待っている光樹、風花に微笑みながらそう言った。

「うん！行こう行こう！お兄ちゃんも早く！」

光樹の手をとりユリの手をとり大はしゃぎで歩き出す風花。

「あ、待って風ちゃん・・・もっとゆっくり・・・。」

それにつられ引っ張られる様に歩きだす光樹。

ユリも同様に・・・。

「もう！急がないと日が暮れちゃうよ！」

なかなか着いて来ない二人に、重たく前に進まない手に頬を膨らま

せて仕方なくペースを落とす。
まだ家を出て十歩も進んでいない距離だ。
「くすくす・・・・そんなに焦らないの風花ちゃん。・・・・まだ今日は始まったばかりなんだから。」
風花の言葉に苦笑じみた微笑みで返すユリ。
「だってぇ〜！・・・・」
「もっとゆっくり歩いていっぱいお喋りしながら行きましょう？そうしたらお店が開いているちょうどいい時間になると思うし、なによりその方がもっともっと楽しいわよ？」
「そうか！・・・・・そうだよね！」
光樹の手とユリの手をブンブンと振り恭順の意を示す。
「じゃあゆっくり行こう！いっぱいお話して行こう！」
すっかりその気になった風花。二人を交互に見上げ、二人の腕を相変わらず振り振りしたままテンションを上げていく。
「じゃあ、バスを使わずに歩いていきましょう。ちょっとだけ時間がかかるけど三人で楽しく歩いた方良いし身体にも良いわ・・・・。」
「うん！そうしよう！そうしよう！・・・・ね！・・・・・お兄ちゃん！・・・・・・・お兄ちゃん？」

元気良く問いかけた風花の言葉をかわすかのようにキョロキョロと挙動不審に辺りを見回す光樹。

庭乃家を出て道を歩いた途端にこのような動作を取り始めた。

「どうしたの？・・・お兄ちゃん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（キョロキョロ）」

「・・・・・・お兄ちゃん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（キョロキョロ）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・お兄ちゃんっ！！！？」

「わっ！・・・・・な、なに風ちゃん？（汗）」

身体をビクンと波立たせ風花の方を見る光樹。

「さっきから呼んでるのにどうしてこっちを向いてくれないの？」

不思議そうな目で光樹を見る。

「あ、ごめんね風ちゃん。気が付かなくて。」

「ううん。それは別に構わないよ。・・・・でもどうして周りを気にしてるの？」

「そ、それは・・・・・。」

まだ少し周りを気にするように視線を右往左往させる。

「・・・・・ま、周りの人が僕のこと・・・男の子なのに女の子の格好してるって分かっちゃったり
変に思われたりしないかなぁって思って・・・。（赤）」

まだ人通りの全くないところを歩いているのだが、自分の格好に対する他者の視線、
反応を過敏に想像して心を落ち着かせなくさせているようだ。それはまあ男としてとても当り前である。
貴方がもし朝から女装して外に出かけなければならないという事になり、いざ外に出てみればそれはもう平静を保ってはいられないだろう。
違う意味で平静を保っていられない人には光樹君の気持ちはわからないだろうが。

「なぁんだ！・・・そんなこと全然心配しなくて良いよお兄ちゃん！
お兄ちゃんは今はカンペキな女の子だよ？・・・・それもとっても可愛い女の子！」

うんと気持ちを込めて言葉を紡ぐ風花。
しかしそれはそれで複雑だと言わんばかりの困り顔を浮かべる光樹。

「う、うん、・・・ありがとう。（赤）・・・・・でも、なんか複雑だよ？・・・・女の子の格好が似合うなんて・・・・。」

「そんなことないよ！・・・とっても綺麗な顔をしてるからそうみえるんだよ。お兄ちゃんはカッコいいし綺麗なの！
将来風花をお嫁さんにもらってくれるって約束したんだから女の子の格好ぐらい似合って当り前だよ？」

なんだかよく分からないフォローをする風花。そしてさりげなく微笑ましい大胆発言。

「え、風ちゃんをお嫁さんに！？」

「そうだよ！（ニッコリ）」

「い、いつ言ったの・・・僕・・・。」

「毎日風花のこと好きって言ってくれてるでしょ？」

「あうっ！・・あ、あれは別に・・・・。（汗）」

「え？・・・・いや・・・・なの？」

「そ、そんなことないけど。」

「じゃあ、結婚してくれる？」

「う・・・・・・う・・・ん・・・・。」

風花の強引な押しの強さにタジタジになりながら頷く。
まあまだ１０歳の子供がいうことだから話半分という気持ちもあったのだが・・・。

「やったー！」
愛する兄にプロポーズに応えてもらえて嬉しそうな声を上げる風花。
「ははは・・・・は・・・・。」
困ったような声を上げる光樹。

「じゃあ、私も光樹のお嫁さんにしてね？（ニッコリ）」
二人の愛の語らい（？）に嫉妬したのか突然参戦するユリ。
「えっ？」
驚く光樹。
流石にユリがこの冗談に付き合うとは思わなかったらしい。
「良いよー！」
なぜか勝手に承諾する風花。
「二人でお兄ちゃんと結婚しよ！」
勝手に法律を無視する風花。
まあ風花の結婚もあからさまに法律を無視しているのであるが。
「そうね。（ニッコリ）」

そう言って優しく微笑むと、ユリは光樹の手をキュッと柔らかく握り締めた。

「うぅ・・・。（真っ赤）」

家族として大好きな二人に結婚を申し込まれた光樹。
とても嬉しいのだが気恥ずかしい感じがして思わず顔を赤らめる。
いつのまにか女装に対する恥ずかしさはどこかに飛び去っていた。

「お兄ちゃん、可愛い♪」

そういうと風花は光樹の腕にギュッとしがみつく。

「風花ちゃん、ルージュをつけているんだから気をつけてね。」

「は～い。」

5分ほど歩いたよ。

「うわ～・・・色んな景色がいっぱい・・・・・・・。」

キョロキョロと辺りを見回し、次々と形をかえる景色に目を丸くする光樹。
まだ疎らな間隔で住宅が建つ、緑の多い郊外。木々が生い茂った広い公園も見える。

「空も・・・・・こんなに青い。」

抜けるような青い空。霞みのように薄っすらと彩られている雲が美しい。

「病院から見てた空と違う気がする。・・・・・・へへへ・・・すっごくキレイだ！」

鳥かごから開放された小鳥のように生き生きと両手を広げ、きらめくような笑顔を浮かべる。
大きく息を吸うとまだ日の光に暖められていないヒンヤリとした空気が胸いっぱいに広がる。

「すごいなぁ！・・・・すごいなぁ！」

腕を広げたままクルクルと身体をコマのように回転させる。
それによってスカートも遠心力でふわりと浮く。足が涼しくて気持ちいい、と光樹は思った。

「気持ち良いよね！お兄ちゃん」

光樹の深呼吸を真似して、胸いっぱい空気を吸う風花。
そして光樹と同じようにクルクルと回りだす。

「そうだね風ちゃん。それに景色がとってもきれいだし。」

「うん！」

風花にとっては特に見慣れた景色だったが、光樹には目に映る全てが未知の景色。
未知の場所で身体が知覚する全ての刺激が新鮮だった。自然と意識が高揚してくる。

「そんなに回ってたら目まで回ってしまうわよ？」

喜んでいる光樹を嬉しそうに見つめながら、苦笑したように言うユリ。

「だって気持ちいいんだもん。」

「だもん！」

ユリの忠告にそう応えた二人は前に進みながら依然として竹とんぼのようにクルクル回り続ける。

「もう、・・・そんなことしてたら・・・・」

ユリがそんな二人に更なる何かを忠告しようとしたとき・・・

トコトコ、トコトコ、と目の前から主婦のような二人組みが歩いてきた。

「空がクルクルしてるぅ〜〜〜〜。」

「してるぅ〜〜〜。」

二人は楽しそうに回っている。前から歩いてきている脅威には全く気づいていない。

「雲がくるくるしてるぅ〜〜〜〜。」

「してるぅ〜〜〜〜。」

かなり近づいてきているが、回るのに夢中で気がつかない。
ユリはもう手遅れになった事態に白旗を振ったようで、ただ黙って歩いていた。
歩いてきている脅威達はすでに光樹たちを視線のなかに入れ、ニコニコと微笑んだ。
それは子犬が何か可愛いことをしている時に思わず微笑んでしまうような、そんな微笑みだった。
まあ目の前から可愛らしい美少女が楽しそうな笑顔を浮かべながらクルクルと回っていれば、
そりゃあ頬も緩むと言うものである。

（クスクス）（クスクス）

回ることに空を見上げる事に夢中になっていた光樹はどこかから忍ぶような笑い声が聞こえてくることに気がついた。

「・・・・・・ん？」

不思議に思った光樹は回るのを止め、声のする方向を見た。

「はうぅ！？（真っ赤）」

そして急激に顔を紅くすると、そのまま目線を下に向ける。
いつのまにか自分達以外の人間が存在していた。しかも楽しそうにクルクル回っているのを見られたのである。
恥ずかしさの極地に達した光樹はひたすら主婦達と視線を合わせないように下を向き続ける。
主婦達はニコニコと微笑んだまま、特に何も言わずに通りすぎていく。
あまりにも紅くなっている光樹に遠慮したのだろうか。

「どうしたの？・・・お兄ちゃん。」

急に止まった光樹を不思議に思った風花が自分の動きを止めて聞く。
しかし最後まで言い終わった瞬間に何が起こったのかを悟った。

「あちゃ！・・・見られちゃったね。」

軽いものである。
無邪気で明るい性格の風花なのだから、当り前といえば当り前である。
だが、そんな風花とは違う光樹は、主婦達が完全に角を曲がって見えなくなったのを確認すると、

「恥ずかしかったよぉ～～～。（真っ赤）」

こぼす様な声で言った。

「どうして言ってくれなかったのユリお姉ちゃん！？（赤）」

「だって聞いてくれなかったでしょ光樹も風花ちゃんも。」

「そんなぁ・・・・・」

「大丈夫よ。二人とも可愛かったから。」

「そういう問題じゃないよぉ。・・・・それにあんなに笑われちゃって・・・。

もしかしたら僕が男の子だってばれたのかなぁ。」

後ろめたい事をしていると思っているために被害妄想が強くなっている光樹。

「そんなことないわ。いまの光樹はどこをどうみても女の子だもの。

笑ってたのは可愛かったからよ。」

「・・・・・・ぅぅ。（赤）」

それでも納得いかないのか、光樹は唸るように声を漏らした。

「あ、あのぉ・・・・・・・や、やっぱり気づかれているんじゃ・・・・・・（赤）」

周囲から感じる視線に戸惑いながら隣にいるユリの手を強く握り締める。

「大丈夫よ。」

ユリは簡潔にそういうと光樹の手を優しく握り返した。

軽い紆余曲折を経て街の中心地へたどり着いた三人。

今日は休日なので、家族連れやカップル、友達同士に一人歩きなど様々な人々が道を行きかっていた。

しかしまだ午前中の早い時間なのでピーク時に比べると大分少ない。

「で、でもなんか・・・みんな僕たちのこと見ているような・・・・・・あ、今、あの男の人と目が合った。（赤）」

すれ違う人間が、老若男女関係なく自分達を見てくる。

特に若い男女がハッキリとした視線を向けてくるのだ。

「お兄ちゃんが可愛いから見ているだけだよ♪」

自分の兄が注目されている優越感からだろうか、風花は跳ねるような声で光樹の腕にしがみつく。

事実、光樹は大変に注目されていた。しかし注目されていたのは光樹だけではなかった。

風花とユリもあわせての三人が注目されていたのだ。

大人びた雰囲気をもつ美少女であるユリ。美しい容姿とスラリとし

た身長に抜群のプロポーション。
かたや可愛らしいという言葉の本質を独り占めしているような美少女、風花。
そして可愛らしさと可憐さを兼ね備えた美少女である光樹。
そんな後光が差すほどの美少女が道を歩いているのだから、若いカップルにしても一人身にしてもついつい見てしまうものである。
「そうね。光樹が可愛いからみんな見とれているだけ。誰も男の子だって気づいてはいないわ。」
「でも念のためにお兄ちゃんと呼ぶのはもうやめといた方が良いわね、風花ちゃん。人通りも多くなってきているし。」
「あ！そうか！」
根本的なことに気が付かされた風花。
追いつもの癖でそう呼んでいた。
「ええ。折角女の子の服装に着替えているのにばれちゃうかもしれないしね。」
「わかったユリ姉ぇ！・・・じゃあ今度からお姉ちゃんって呼ぶようにする！」
「良いでしょ！？お姉ちゃん！！」

キラめく表情でそう宣言する。

「あ、う、うん、分かった。なんだか恥ずかしいけど、ばれちゃうから仕方ないよね。」

自分の本来の性別が否定されているようで、複雑な気持ちの光樹。

「じゃあ改めてよろしくねお姉ちゃん！」

「うん、よろしくね風ちゃん。（ニッコリ）」

だがもう女装している事でだいぶ免疫がついたらしく、すぐに笑顔を返した。

「じゃあこの件に関してはもういいようね。」

「うん！バッチリだよ！・・・ところでユリ姉ぇ、これからどうするの？」

「そうね。春斗が来るまで2，3時間あると思うからその間に出来るだけ光樹の買い物を済ませちゃうわ。
まずは携帯電話を見に行きましょう。それから光樹の女装用の下着とか服とかを買いに行きましょう。」

「え？・・・携帯電話？・・・・・・二人とも持っているから・・・・・・もしかして僕の？」

「そうよ。光樹には特に必要だわ。何かあったときにすぐに連絡が取れるし。だから買いにいきましょう。」

「う、うん、わかった。」
「やったねおに・・み、光樹お姉ちゃん。これでいつでも風花と連絡が取れるね！」
「そうだね。」
「メールもいっぱい送るね！」
「うん、楽しみにしてるよ。」
「じゃあ、早速買いに行きましょう。」
「「うん！」」

「いらっしゃいませー！」
ドアが開き、三人が姿を見せた瞬間に店員の声が響く。
三人は大手家電量販店の携帯コーナーではなく、メーカー直営の店に来ていた。
なぜなら近かったのと春斗たちが全員同じメーカーで統一している

からで、そうすることにより料金の割引を受けているのだ。

「さぁ、好きなのを選んで良いわよ。春斗も良いって言っていたし。最新機種にする？」

店内はすでに何組かの客が足を運んでいた。
店員はそれらの客についているためこちらに来る様子はない。
携帯についてあまり詳しい事を知らない作者には好都合だ。（笑）
というかどこでも望んでないときに店員に来られると辛いよね？
基本的に作者は人間嫌いです。（爆）

「何でもいいよ僕。・・・あんまり携帯電話のことわからないし。安いやつで良いと思う。」

「そう？・・・・・実は私もよく分からないのよね。あまり使わないから。」

「じゃあ、風花が教えてあげる！」

待ってましたと小生意気に胸を張りながら（笑）風花が説明を開始する。

「最近のやつはまずテレビが見れるんだよ！」

実に簡単な説明だが。

「そ、そうなの？・・・・すごいね。・・・・・・・でもこんな小さい画面でテレビを見たら目が疲れそうだから・・。」

目の前にある様々な携帯を見ながら呟く。

「う～ん、そうだね。じゃあ動画付き携帯はどう？・・・」

「動画ってビデオみたいに動いてる姿が撮れるってこと？」

「そうだよ！ずっと撮れるわけじゃないけどビデオみたいに撮れるの！」

「そうなんだ、・・・凄いね。・・・・でもそんなに撮る事もないから別に良いや。」

意外とこういう面に関しては無関心というか無気力な光樹。（笑）

「う、う～～ん、じゃあ写真だけ撮れるヤツにする？・・・風花もこれ使ってるけど・・・・。」

「風ちゃんと同じ？」

「そうだよ！今は動画つきを持ってる人が一杯いるけど、風花はその前に買ったから写真だけなの。ユリ姉ぇもそうだよね？」

「ええ。」

「そうなんだ。じゃあ僕もそれで良いよ。」

「ホントに良いの？・・・これって世代的に古いから新しい感じではないよ？

それに動画付きにも写真を撮れる機能はついてるよ・・・・・写真だけの方が安くはなるけど・・・。」

「別に新しくなくても良いし、安くなるならそれに越した事はないし・・・。」

光樹の目に決断の光が宿った。

それを見て取った風花は、

「それなら、今度はこの中から好きな形のモノを選ぶと良いよ。」

そういってカメラ付きのコーナーを案内する。

「わかった。それにしても詳しいね風ちゃん。」

「えへへ・・・・学校でお友達と携帯の話とかするから・・・・。」

「ふ〜〜ん、・・・すごいなぁ・・・・。」

「へへへ・・・・別にそんなことないよ。（赤）」

光樹に尊敬の眼差しで見られて本気で照れる風花。

「あ、こ、これなんかどう？・・・やっぱり携帯は折り畳みが便利だし・・・。」

そう言って照れ隠しのためか早めに自分の話題から光樹の意識を逸らす。

「うん、それでいい。」

わりと即答な光樹。

「え、あ、べ、別にこれじゃなくても・・・・ただ言ってみただけだから・・・・。」

あまりにあっさり決めるものだから、流石の風花もタジタジになる。

「ううん、これが良いな。風ちゃんが薦めてくれたんだし、形もスッキリしていて良いと思うから。（ニッコリ）」

「・・・・光樹お姉ちゃん。（潤）」

光樹の言葉に感激する大袈裟な風花。

「じゃあ、これにするのね？」

「うん。」

ユリの問いに首を縦に振る光樹。

「お姉ちゃん・・・本当に良いの？」

「うん、全然良いよ。」

「じゃあ買いに行ってくるからちょっと待っててね。」

「はい、光樹。」

色々と手続きを終えたユリが収穫物を持ってやってくる。

「わぁ！・・・早速開けてみよう！光樹お姉ちゃん！」

そういって許可なく携帯を取り出す風花。

別に光樹もそのつもりだったようで止める様子はない。

三人は店員の「ありがとうございました！」という声を背中に受けながら店を出る。

「まだ今日はメールは使えないそうよ。明日以降は大丈夫だって。電話はもう使えるみたいだけど・・・。番号はこれね。」

「うん、わかった。」

「え～！メール使えないのぉ！？・・・折角メールしようと思ったのにぃ！」

「仕方ないよ風ちゃん。・・・明日いっぱいしよう？」

残念がる風花を慰める光樹。

「う～ん、わかったぁ・・・。じゃあ変わりに電話しようっと。」

そういうとポシェットから自分の携帯を取り出す。

「あ、その前に登録しないと・・・。」

手に持った携帯電話を素早い動作で使いこなしていく風花。

「うわぁ・・・凄いね風ちゃん。・・・・どうしてそんなに早く出来るの？」

流れるような風花の動作を見ていたく感心する光樹。

「慣れだよ、慣れ。（赤）・・・・お姉ちゃんもこれぐらいすぐに出来るようになるよ。」

「そうかなぁ・・・。」

「うん、・・・良し完了！・・・じゃあ早速電話してみるね。」

「う、うん、・・・・でも勿体無いんじゃない？・・・何の用事もないのに電話するなんて・・・。」

嬉々として番号を押していく風花にそういうと、問うような視線でユリを見る。

「え～～！ユリ姉ぇ良いでしょ！？・・・お姉ちゃんの初携帯電話の練習なんだから！」

自分がかけたいだけなのだが、何とかそれらしい言い訳を思いつき懇願する。

「そうね、少しだけお話しするぐらいなら構わないんじゃないかしら。」

頬に手を当て首をかしげる素振りを見せたユリはすぐさまそう言って許可を出した。

「やった～！・・・じゃあちょっと待っててねお姉ちゃん！」

「う、うん。」

光樹の頷きも見ないうちに走り出した風花は声が届かないくらいの距離まで行く。

そして再度ボタンを押し始める。

数秒後・・・。

ピピピピピ、ピピピピピ、ピピピピピ

と、着信音が鳴り始める。

「あ、鳴った。」

当り前すぎるちょっとボケた言葉を吐く光樹。

「ユリお姉ちゃん、こ、これって・・・どこで電話するの？」

鳴り続ける電話を取れないことに焦りながらユリに問いかける。

「ここの電話のマークがついてる所よ。切るときはこっちがわの電話を押すの。」

「あ、わかった。ありがとう。」

「どういたしまして。（ニッコリ）」

ピッっと教えられたボタンを押して電話を耳に当てる。

『はい、も、もしもし』

『お姉ちゃん遅いよぉ！』

『ごめんね。どこで電話を取ればいいのか分からなくて・・・』

『あ、そうだったんだ。じゃあ仕方ないね。・・・ふふ、それよりもどう？・・・・初めての携帯は。』

『うん、なんか不思議な感じだね。風ちゃんがあんなに遠くにいるのにすぐ近くで話しているような感じだし。』

『そうだね。逆にこんな中途半端な距離で話してるから変な感じなのかもね。』

『ふふふ、そうかもね。』

『へへへへ。』

距離的に離れてはいるが、普通に相手の姿が見れていて何も電話しなくてもいいじゃない。
っていう距離で電話しているので、可笑しさがこみ上げてきた様子の二人。クスクスと笑いあう。

『あ、そうだ。光樹お姉ちゃん！』

『え、なに？』

『電話で今日のアレをやってよ！』

『えぇ！・・・そんな・・・・なんか恥ずかしいよ。』

『良いでしょぉ！・・・電話で言って貰えるのってなんか新鮮だし。恋人同士って感じがするし。』

『・・・うぅ～・・・・分かったよぉ。』

風花はもう絶対に言わなければ納得しないであろうと感じた光樹は、いつもと違うシチュエーションにテレながら言葉を口にする。

『えっと・・・・・だ、大好きだよ、風ちゃん。（赤）』

『えへへ、・・・風花も大好きだよ光樹お姉ちゃん♪』

満足げにそう応えた風花。

『じゃあもう切るね。』

『う、うん。』

『ばいば～い。』

電話を切ってすかさずこちらに走ってきている様子。（笑）

「光樹、どうだった？」

「うん、なんか珍しくて楽しかった。」

「そう、良かったわね。（ニッコリ）」

「これからは何かあったら遠慮なく電話をかけてね。緊急の場合は春斗に一番先にかけたほうが良いわ。
繋がらないときは私にかけてね。余程の事がない限り私は出るから。」

「うん、わかった。ありがとう、ユリお姉ちゃん。（ニッコリ）」

「良いのよ。・・・それよりも暇なときは私にもメールを送ってね。」

「うん、もちろん！・・・ユリお姉ちゃんもね！」

「ええ。（ニッコリ）」

「到着ぅ～～！！！」

会話が終わった瞬間に風花が二人の下に到着する。
今日のお勤めを聞いたためにすこぶるご機嫌になっている。
まあ朝から終始ご機嫌なのだが。

「ねぇねぇ！次はどこに行くの！？」

「次は光樹の下着や服を買いに行くわ。」

「いぇ～い！・・・風花がお姉ちゃんに似合うヤツいっぱい選んであげるね！？」

「あ、う、うん。」

かなり複雑な様子の光樹。

「男の子ようのものも買いましょう。光樹も欲しいでしょ？」

「う、うん、・・・僕だって一応男の子だから・・・。」

「もちろん両方風花が選んであげる！」

「じゃあ、行きましょう。」

「うん！」「うん。」

第六話

ガチャ、

『はい、もしもし。』

『あ、あの！・・・は、春お兄ちゃんですか！』

『ああ、そうだけど・・・・光樹か？』

『う、うん！そ、そう！・・・・光樹だよ！』

『そうか・・・・携帯買ったんだな。』

『う、うん！・・・・さっき買ってきたんだ！』

『そいつは良かった。つーか緊張しすぎだぞお前。』

『っ！？・・・だ、だってまだこういうのに慣れてなくて！』

『ははは、そうだな。そうでないと光樹らしくないもんな。』

『ぅぅ。（赤）』

『で、どうした？・・・何かあったのか？』

『え？・・あ、ううん！・・・違うの！・・・・もう買い物が済んだから春お兄ちゃんを待とうと思って・・・』

『もう服やら何やら買ったのか？』

『うん。全部買っちゃった。』

『そうか、・・・満足できるものは買ったのか？』

『うん！・・・色々と買ったよ。・・・お、女の子の服とかも買ったけど、男の子用の服も買ってもらっちゃった。』

『そうか、良かったな。』

『うん、でもなんかそんなに買ってもらって申し訳ないような気がして・・・』

『何言ってんだ。お前はそんなこと気にしなくて良いんだよ。それぐらいの金を出せないほど庭乃家は落ちぶれてないからな。』

『う、うん・・・・・。』

『お前は何も気にせずにやりたいことをやれば良い。・・・それよりもお前達今何処にいる？』

『え？・・・あ、うんと・・・・風ちゃん、ここってどこ？・・・・・・・・え、・・うん・・・・噴水通り・・・・・・・わかった。』

『えっと、わかったよ春お兄ちゃん、噴水通りの真ん中ぐらいだって。』

『ああ、あそこら辺か。』

『春お兄ちゃんはどこにいるの？』

『俺はいまそっちに向かってる所だ。噴水通りなら車をおいて、それから歩いてだから、あと15分ぐらいでつく。』

『15分ぐらいか・・・・じゃあ待ってるね。』

『ああ、分かりやすいように噴水前で待っててくれ。』

『うん、わかった。』

『早く可愛くなった光樹に会いたいから急いでいくよ。』

『ぅぅ・・・そ、そんなこと言わないで・・・・・恥ずかしくて会えなくなるよぉ。（真っ赤）』

『っはははは！・・・・じゃあ後でな。』

『う、うん、・・・待ってるね。（赤）』

「ハルのやつこっちに向かってるって？」

「うん、あと15分ぐらいで来るって。それまで噴水前っで待ってて
てくれって。」

「そうね。あそこは待ち合わせスポットだから分かりやすいわね。」

「じゃあ、早速行ってみよう！」

垂直からやや斜めに傾いた日差しを受けてキラキラと光る噴水の水しぶき。
すでに時間は午後1時を過ぎ、それのさらに半分を過ぎ去ろうとしていた。

「お腹すいたよぉ～～～！！！」

噴水横のベンチに座り、足をぶらぶらさせながら風花がダルそうに呟く。

「そうだね。いっぱい歩いたからお腹すいちゃったね。」

その隣でボンヤリと空を見上げていた光樹もそれに同調する。

「もう少しで春斗が来るから、何か美味しいものでも食べに行きましょう。」

さらにその隣でユリが言葉を発した。

「うん！なんか美味しいもの食べよう！」

ユリの言葉に元気を貰ったようにテンションを回復させる風花。

「ふぁぁ！！！・・・それにしても朝よりもだいぶ人が多くなったねぇ～～。」

気合い一発の大きな伸びをしてから、辺りを見回した結果の感想を述べる風花。

たしかに辺りは街に来た当初よりだいぶ人通りが多くなっていた。

萌々市の繁華街の中心地である噴水通りの噴水前であるし、天気も良いし気温もちょうど良い。

まさに買い物日和であり出かけるのに最適な日であるのでかなりの人で賑わっていた。

「そうだね。・・でも朝もそうだったけど・・・どうして、通り過

ぎる人たち・・・僕たちのこと見ていくんだろう・・・・・。（赤）
やっぱり僕のことばれちゃってるのかなぁ・・・・。」

朝よりも人が多い分、余計に強い圧力のように突き刺さる視線に最悪の想像を呼び起こす。
でもやはり時間が問題を解決してくれているのか、朝に比べて女装に対する抵抗や羞恥といったものはだいぶ少なくなっていた。
もちろん依然として恥ずかしいし、見られるとハラハラしたり、頬を染めたりはしてしまうのだが。

「大丈夫だって光樹お姉ちゃん！・・・お姉ちゃんはどっからどうみても女の子だよ！風花が保証する！」

「そうよ光樹。今の光樹におかしい所は何もないわ。」

ある意味、それがおかしい事なのであるが・・・・。

「で、でもぉ・・・。（赤）」

それにしたって随分とみんなが光樹の事を見ていく。実際、光樹の容姿は平均を遥かに上回るほどに凄い。
ちょっと頼りなげで優しそうな瞳やほっそりとした顎のライン、柔らかそうなみずみずしい唇が実に可憐で美しい容姿を作り上げている。
そんじょそこらの美少女では太刀打ちできない可愛らしさを秘めているので、ついつい視線がいってしまうというのも無理からぬところ。
しかもそれに加えて、光樹よりちょっと上の年代の大人びた雰囲気と優しく柔らかな雰囲気を持つ美少女ユリがいることも、
それに拍車をかけている。将来有望な若い医者に一目惚れされプロ

ポーズされるほどの美貌である。
街で何度かモデルのスカウトもされたことだってある。そんな規格外ともいえる美しさの二人がベンチに座っているのだ。
・・・え？・・・風花？・・・・・風花はまだ１０歳だから・・・。
（笑）
カワイイから見ちゃうけど、凄い可愛いなぁって思うだけで、ある一部の趣味の人しかそこから先の感情は芽生えない様子だよ。
ただそういう人間がいたら風花に対する視線は一人だけでもとても強烈なものになるだろうね。

そんなわけだからカップルの片割れとか一人身とかの男がユリや光樹を舐めるような視線で見るわけ。
もちろん女の子も羨望と嫉妬の眼差しで見てるんだけど。

で、その舐めるように光樹達を見て、お知り合いになりたいなぁと思っている人間は多いのだけれど、なかなかそういう猛者は現れない。
何故かと言うと、やはり風花がネックになっているから。（笑）おまけのように付いている風花が邪魔なの。（涙）
何人もの猛者が虎視眈々と三人を狙っているのだけど、さすがに連れ回しただけで犯罪の匂いがプンプンする風花がいて手を出さないでいる。

「ねぇ～ねぇ～、君たち三姉妹なの？」

しかしそんな犯罪の匂いを吹き飛ばすようにいかにも軽薄そうなチャラチャラとした服装の若者が声をかけてきた。
二人連れの若者で日焼けした肌と伸ばし放題で色の抜けた髪の毛が口調とともに軽薄さを助長している。

「え？・・・・・うわぁ！」

光樹はいきなり声をかけてきた二人に驚き、ユリの背中に顔を隠してしまう。

（ば、ばれちゃったよぉ～～～！（汗））

キュッとユリの服の裾を掴みながらその綺麗な背中を見つめる。

「あれ？嫌われちゃってる？」

「お前の顔が怖いからだろ！」

ユリの後ろに隠れた光樹を見た若者が苦笑気味に言う。

そしてすかさず相方の友達に突っ込まれる。

「お前こそその無精ひげなんとかしろよな。」

「うるさい、これはいいんだよ。お前こそ顔中にピアスつけてるから怖がられるんだよ。」

勝手に互いに話を始めた二人をキョトンとした表情でチラチラと見つめる光樹。

風花は面白そうに光樹のまねをして光樹の背中に顔を隠した。

ユリはそんな二人を一瞬見て、次に若者を見つめると、

「失礼しますね。」

そう言って光樹と風花の手を握りベンチから立ち上がると、歩き出した。

「あ、ちょっと待ってよぉ～」

歩き出した三人に慌てて追いすがる若者。

「なんですか？」

丁寧な物腰で振り返るユリ。

「君たちって三姉妹なの？」

「はい、そうです。」

「すごいねぇ。美人三姉妹だ。」

「そんなことないです・・・。」

「いやいや、そんなことあるって！」

「そうですか。・・・ありがとうございます。（ニッコリ）」

終始冷たくあしらうでもなく、おっとりとした穏やかな物腰で対応するユリ。

（あ、もしかして脈有り！？）

その態度を見て、案の定勘違いしてしまう若者二人。

ユリはこの美貌と物腰で絶対にストーカーに付かれそうな人間である。

（あ、・・・も、もしかして・・・ばれてない？）

ユリと若者のやり取りで薄々と自分が男だと気づかれていない事を悟る光樹。

（あは♪・・・美人三姉妹だって♪・・・・風花もユリ姉やお兄ちゃんと同じくらい美人なんだ♪）

美人な二人と同類に見られてご機嫌な風花。
しかし何故この二人が犯罪の匂いを吹き飛ばしてまで、この二人が接近してきたのかというと、
別に今日はキッカケ作りで十分だと思っているからである。
こんな極上の獲物を今日いきなりどうこうできるとは思っていないのだ。

だからネックになっている風花も関係ないのだ。（笑）
会話のための道具になれば良いな的に考えられている。（涙）
ガンバレ！風花！作者はお前が大好きだ！（エリンギをたくさん食べて早く大きくなれ！）

「ねぇねぇ、これから俺たちと遊ばない？・・・面白いところいっぱい知ってるよ？」

気安くユリの肩に手を回しながら、若者が言った。

「ごめんなさい、私たち人と待ち合わせしているから無理です。」

やんわりとした微笑みとともに、さり気なく肩に置かれた手を払うユリ。（笑）

「え～～！・・・じゃあそいつが来るまでにどっかで茶でも飲もうよぉ！」

「あともう少しで来る筈ですから・・・・ごめんなさい。」

まるで子を守る草食獣の母のように光樹と風花を背中にかくまい、断り続けるユリ。

「そいつきっと来ないって！・・・ねぇ君もそう思うだろ？・・・・それより俺たちと遊ぼうよぉ！」

そういって意外と頑ななユリを攻めるのはやめて、崩れやすそうな後ろの光樹を狙う。

「え、あ、あの！・・・・そ、その！」

突然の攻撃に混乱状態に陥る光樹。
それを見て（ちゃ～んす（ニヤリ））と思った若者は光樹に対して更に攻撃の手を加えようとした。

「はい、そこまでだお前達。俺の連れにあまり馴れ馴れしくしないでもらいたいな。」

だがそこで若者達の背後から謎の声が、そして光樹たちには聴き憶えのある声がした。

「ああ？誰だ！」

若者達が振り返りその声を主を威圧しようとする。
しかし、すでに勝敗は決していた。

そこには明らかに自分達より上位種族のカッコいいというより綺麗と言ったほうが良い様な青年が立っていたのだ。

「誰って・・・こいつらのご主人様だけど。」

そしてこの一言である。（笑）

「「「ご、ご主人様ぁ～～！！！」」」

若者も光樹も風花も含め全員が（ユリはおっとりと傍観）素っ頓狂な声を出す。

「そう。だからお前達につけ入る隙はなし。こいつらは俺の命令しか聞かないから。」

そういって青年は光樹の元に近づき、腰をかがめて目線を合わせると、

「これまたお姫様みたいに可愛く変身したな光樹。ご褒美だ。」

そう言って光樹を大きな腕で包み込み抱きしめた。

「ぅあ！（真っ赤）」

一瞬でゆでだこの様に全身を紅く染め上げる光樹。

他の人間はこの展開についていけず唖然としている。（ユリはまったりと傍観）

「ま、そういうわけだから、お前達は帰っていいぞ。」

光樹を抱きしめながら、戦後処理のような淡々とした表情でそう告げる。

「・・・・・・・・・・・・・・・く！・・・・憶えとけよ！」

歴然とした力の差を感じた若者達は、
何故か悪役の捨て台詞のようなものを残して去っていく。

「そんなもん憶えてるわけないだろ。・・・必要の無いものはすぐ忘れるのがオレの特技なんだよ。」

遠ざかっていく二人組みを見ながらそう呟く春斗。

「・・・ぅぅ。（真っ赤）」

光樹は身体を暖かく包み込む青年の体温とさわやかな香水の匂いとそれに混じる青年の匂いに胸を高鳴らせる。

「抱き心地が良いなぁ、光樹は。」

そういって更に自分の胸に光樹の身体を押し付けて、全体を感じようとする。
光樹もそれに応じるように自然に青年の腰に手を回していく。
更なる抱擁によって深くなる温もりと強くなる鼓動。胸に広がる大人の匂い。
憧れている人物からの抱擁による感動と周囲から感じる視線による羞恥で、光樹の精神は腰砕け状態になってしまった。

「・・・は、春お兄ちゃん・・だ、だめぇ・・・・・ぼ、ぼく・・・

・おかしくなっちゃう。（真っ赤）」

ただ抱きしめられているだけなのに、それだけなのに可憐な美少女光樹は瞳を潤ませ掠れた声でそう呟く。
これ以上抱きしめられていたら、様々な感情が暴発して気絶してしまうかもしれなかった。
今でさえ何も考えられずに頭が真っ白な状態なのだから・・・。

「ははは、カワイイやつだなお前は。」

春斗はそういってすぐに光樹を開放した。その場で座り込みそうになる光樹。二人を引き離そう接近していた風花は慌ててそれを支える。
そして春斗は辺りを見回す。周りは一部始終を唖然としたり興奮してたり好奇心に満ちてたりして見ている。
思わず見とれてしまうような可憐な美少女が抱きしめられた事により、頬を染め瞳を潤ませている。
春斗に対する嫉妬や羨望もビシビシと伝わってくる。それと共にかなりの美形である春斗に抱かれている光樹に対しても
同じ視線が浴びせられている。

「そうかそうか。羨ましいか。・・・・ならこんなのはどうかな？」

自分に浴びせられる嫉妬に気を良くした春斗は
風花が例えるならば薄気味悪いと表現するだろう笑みを浮かべ、今度はユリに近づいた。
そして先ほど光樹にしたように、その長い腕で抱きしめた。

「どうだどうだ。俺はこんな美人にこんなことが出来るんだぞぉ！」

物凄い子供じみた優越感で辺りを見回す。
自分は医者すらも一撃で落とす美貌の持ち主を抱きしめているという自慢を回りにアピールする。
全くもって大人気ないし、教師としてあるまじき行為だ。

「やめて春斗。・・・・こんな所で。」

ユリが幾分眉を寄せながら春斗に忠告する。
光樹のように嬉しがっている様子はない。かといって嫌がってもいないのだが。

「ほらほら、こんなことだって。」

ユリの言葉に全く耳を貸さない春斗。
光樹の時と同様に著しく強くなってきた羨望嫉妬の視線に気を良くすると、
ますます行為をエスカレートさせていった。

「きゃ！・・・は、春斗。」

なんと今度は背後から抱きしめる形のまま、両手でユリの胸を揉みし抱いたのだ。
なんというかそれは教師以前に人間としてどうかと思う。

「もうっ、・・・いい加減にして春斗っ。」

スレンダーな身体に魅力的に調和するふくよかな膨らみを揉まれたユリ。
彼女にしては少し強い口調で、しかし特に抵抗することなく非難めいた視線を送る。

「冗談だよ、冗談。」

悪びれた様子もなく抱擁を解き謝る。

「これでもう誰もよって来ないな。計画通り計画通り。」

間違いなくただのイタズラだったのだろうが、そんな事を言って自分を正当化する春斗。

春斗の気まぐれの最初の被害者である光樹は未だに頬を染めて瞳を潤ませている。

「さ、なんか食いに行くか！」

随分と爽やかにそう宣言する春斗。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよハルぅ！」

しかしここで案の定作者泣かせの風花が怒鳴り込む。

「どうした？」

あ、いたの？みたいな表情と口調で問い返す。

「あ、そうか、ごめんごめん。・・・その服、似合ってるよ。それに珍しく口紅なんかつけて・・・大人っぽくなって綺麗に見えるぞ。」

「え？ホント？・・・あ、ありがとう！（赤）・・・ふふふ・・・大人っぽいだって・・・・ってそうじゃないわよ！！！それもあるけ

ど！！！」

「ったく、じゃあなんだよ。」

「なんで風花だけ抱きしめないのよぉ！」

自分だけ疎外されたのが気に入らなかったらしい。

「それにご主人様ってどういうことなの！？」

「あれはあいつらを追い払うためにインパクトのある事を言っただけで冗談だって。
なんで風花を抱きしめないかってそんなことしたらお前怒るだろ？」

「あ、当り前よ！」

「だったら良いじゃん。」

「そ、それはそうだけど・・・・・で、でも・・・・・」

一応理にはかなっているのだが、どうも納得がいかない様子の風花。

「でも・・・ま、まあ、今回は許してあげるわ。・・・だ、だから・・その・・・ふ、風花を抱きしめて良い・・・よ。（赤）」

実は羨ましかったのか、恥ずかしそうにそう言いながらそっぽを向く風花。
いつも口では言い争っているが、根本的に嫌いあっているわけではないし、ある意味一番仲が良いのかもしれない。
そんな複雑な関係なのだが、風花もまだ幼いし、両親は物心つく前

に他界している。いつも光樹に甘えているとは言っても
目の前で光樹が受けたような優しい抱擁を見てしまうと、自分も味わってみたいと思ってしまったのだろう。

「ふぅ～・・・まったく、・・・お前も甘えん坊だな。」

やれやれと苦笑しつつも嫌な顔せず風花に近づく春斗。
春斗もイタズラ好きで風花を怒らせたりもするが、根本的に良いヤツであるし
自分の大切な妹であり家族である風花を嫌いなはずはない。
お互いを信頼しあい、分かり合っているからこそ出来る言い争いなのである。

「ふ、風花は別に甘えん坊じゃ・・・・・ぁ。（赤）」

言葉を言い終わる前に春斗の抱擁が風花を包んだ。
あらゆる女性を虜にしそうな容姿の春斗と誰もが頬を緩ませる程の可愛らしさをもつ風花の抱擁シーン。
プンプンと犯罪の匂いがする年齢さだが、その光景はとてもほのぼのとしていて暖かい感じがした。
まるで子供を優しく抱きしめるお父さんのような光景で、今までのイヤらしい（笑）雰囲気はこれで吹き飛んだ。

周囲のギャラリーもなんだか幸福な気持ちで一杯になってきたし、光樹やユリも嬉しそうに微笑んで照れながらも喜びを隠せない風花を見ている。

「よし、こんなんで良いか？」

十秒ちょっと抱擁を続けていた春斗が抱擁を解く。

「う、うん、・・・ありがとう。（真っ赤）」

借りてきた猫のようにすっかり大人しくなった風花。
まあ春斗に抱きしめてもらうなんて滅多に無い稀なことであるので調子が狂うのも仕方がない。

「いや、俺も風花を抱きしめられて嬉しかったよ。」

嘘とも本心とも分からない微妙な表情の春斗。

「う、あ、当り前よ。（真っ赤）」

「くっくっくっ！・・じゃあ気を取り直して飯でも食いに行くか！・・・光樹はどこに行きたい？」

風花の強がりめいた態度に声を押し殺したように笑うと、仕切りなおしとばかりに光樹へと標的をかえる。

「ぼ、ぼく？・・・・僕はどこでも・・・・・みんなが行きたいところで。」

自分がそんな大それた決定など出来るわけがないし、
もし自分の決定がみんなの気に入らないものだったらどうしようという心理が働く。

「だめだめ、それは却下。今日はお前の行きたい所に行くというのが目的の一つでもあるんだから、何か食いたいものを必ず言って下さい。」

「で、でも・・・。」

「なんかあるだろ？・・・・肉が食いたいとか魚が食いたいとか・・・。」

「う～ん・・・・・・え～っと・・どうだろう・・・・・あ、風ちゃんは何かある？」

困った光樹は風花に助け舟を求める。

「風花はお姉ちゃんの食べたいものが食べたい。」

船はすぐに沈んだ。

「う・・・・じゃあユリお姉ちゃんは？」

もう一度船を要求する。

「右に同じくよ。（ニッコリ）」

やはりすぐに沈む。

「じゃ、じゃあ春お兄ちゃんは？」

最後の望みの船を求める。

「俺はお前が食べたい。」

変な船が来た。

「え？・・・・・ぼく？」

バコッ！

「いてっ！」

「何てこと言うのよハル！」

「つつつ・・・冗談だよ。それにしても風花。お前この意味が分かると言う事は、かなりマセてるなぁ。（ニヤリ）」

「べ、別に知らないわよ！」

「そうなのかぁ？（ニヤニヤぁ）」

「そ、そうよ！・・・・あ、そうだ！・・・・・・お姉ちゃん！回転寿司なんてどう！？

・・・だいぶ前一度行ってみたいって言ってたでしょ！？」

焦ったように言葉をまくし立て、会話を別の流れにもっていく風花。

「あ、うん。そういえば言ってたね。・・・ぼく一回も行ったことないから一度行って見たかったんだ。」

なんでそんなに焦ってるの風ちゃん？っと思いながらも、確かに言われてみれば行ってみたかったし

そう言われると今一番食べたいような気もするなぁという気になってきた。

「じゃあそうしよう！・・・お昼ご飯は回転寿司にけって～～い！

！！」

「なんか風花に誘導されている気もしないでもないが、まあ光樹も満更ではないようだし行くか。」

「そうね。・・・・ネギトロが私を呼んでいるようだし。」

頬に手を当て嬉しそうに呟くユリ。

「ははははっ！今日もお前はネギトロを攻めるつもりか？」

「ええ、もちろんよ。（ニッコリ）」

かなりやる気である。

「良いねぇ。じゃあ寿司食いに行くかぁ！」

「おおぉ！！！」「うん！」「ええ。」

「・・・・・なんか前回と引きが同じだな。」

第七話

ウィ～～ン

春斗を先頭に街の回転寿司屋に侵入する。
中に入ると、騒々しい喧騒が鼓膜を揺らす。そして四人に気が付いた店員が足早にやってくる。

「いらっしゃいませ～！・・・お客様、何名様でしょうか？」

「あ～、４人。」

「４名様ですね。それではあちらのボックス席の方へどうぞ～！！！」

店員の案内で席に誘導されていく四人。
時間的にピークは過ぎているが、まだ店内は混み合っている。
なかなか広い店内の中央に長大なレールがあり、その上を寿司が流れていく。

「うわぁ～～～・・・・お寿司がいっぱい流れてるぅ・・・・。」

目の前でリアルに流れているお寿司に目を丸くして驚く光樹。

「いっぱい並んで周ってるねぇ～～～～。」

ピタリと光樹に寄り添いながら、言葉を返す風花。
その後ろでニッコリと微笑みながら二人を眺めているユリ。

「美味しそうだよねぇ！・・・風花、お腹ペコペコだよぉ！！！」

「そうだね。僕もいっぱい買い物したりして歩き回ったからお腹すいちゃった。」

「じゃあいっぱい食べようね！」

「うん、そうだね。」

「そうよ。光樹はいっぱい食べて身体を丈夫にしなきゃ。」

「う、うん。・・・出来るだけ食べるようにするよ。」

「勝負だよお姉ちゃん！」

「う、うん。」

お腹がすいているといっても、元からそれほど量を食べれる方ではないので曖昧に頷く光樹。

「よぉし光樹！・・・好きなもんなんでも喰っていいぞ！・・・・ウニでもトロでも好きなもん喰え！
風花はかっぱ巻きと納豆巻きだけ好きに喰っていいぞ！」

席について意気揚々とそう宣言する春斗。

「もっと色々なもの食べさせてよ！」

自分の選択幅の狭さに声を荒げる風花。

「ハハハ、冗談だ。風花も好きなもん喰え。」

「当り前よ！」

言うが早いと風花は目の前で周っている寿司に逡巡する。
その間にユリは四人分の醤油皿やお茶を用意する。光樹はたどたどしくそれを手伝っている。
寿司が周っている側は寿司が取りやすいので風花と光樹が向かい合い座っている。
光樹の隣に春斗が座り、その向かいにユリが座るという布陣である。

「あ、これたべよぉ！」

そう言って風花は脂の乗ったサーモンの皿をとった。
急いでテーブルに置くと、箸を使わずにダイナミックに手で掴み醤油をつける。

「お前、食う前に手ぐらい拭けよ。」

自分の手をおしぼりでフキフキしながら呆れたように呟く春斗。

「うぅ・・・・これ食べたら拭くわよぉ。」

いくらお腹がすいていたとはいえ、ちょっと行儀が悪かったかなと思った風花。
だがもう持ってしまっているのでどうしようもなくそのまま口に放りこんだ。

「う〜〜ん！・・・・美味しい！！！！」

口の中にひろがるサーモンの甘い脂に思わず声を漏らす風花。

「お姉ちゃん、コレ美味しいよ！」

そういって残りの一貫を光樹に差し出す。

「あ、うん、ありがとう風ちゃん。」

差し出されたお寿司を手に取り、自分の取り皿に寄せる。
チョンチョンと醤油をつけて口元に持っていく。

「光樹、お洋服に醤油をこぼさないようにね。」

「（コクコク）」

左斜め前からの忠告に頷きながら、目の前から迫り来るサーモンピンクの物体を頬張る光樹。

「お姉ちゃん、おいしい？」

「（モグモグ・・・ゴックン）・・・ぅん・・・・おいしい。」

お寿司を食べたことが無いわけではないが、兄妹ではじめて来る回転寿司。
楽しい会食の中で食べる新鮮なお寿司は単純な感想しか発せないほどの美味しさを光樹にもたらした。

「よかったぁ～！！！」

自分が作り出したモノを褒められたかのように大喜びする風花。

「じゃあ次は何を食べる！？」

そういって新しい獲物を物色する。

「え、えっとねぇ・・・・・。」

焦るように周る寿司を眺める光樹。

「じゃ、じゃあマグロを食べるよ・・・。」

「わかった！」

ささささっとマグロの皿を回収する風花。

「はい！」

「ありがとう風ちゃん。」

皿を受け取り礼をいう光樹。

「じゃあ俺はイカでも食べるか。・・・光樹、イカを取ってくれ。」

「あ、うん。・・・・よいしょっと。・・・はい春お兄ちゃん。」

「ありがとよ。」

光樹が手に取った皿をサラリと受け取った春斗。

「これまた新鮮そうなイカだなぁ・・・。」

感心したように呟き、寿司に醤油をチョチョンとつけると口内に放る。

コリコリとした歯ごたえとイカの甘さが舌に染み込む。

「美味い！」

喉をごくんと鳴らすと同時にそう叫んだ。

「風花ちゃん、私にネギトロを取ってくれる？」

春斗の叫びに触発されたのかユリも好物のネギトロを所望した。

「りょ～か～い！」

弾むように頷いてネギトロを回収しに行く風花。

楽しい昼食タイムが今、始まった。

「次は～～～～～～これにしよっ！！！」

キョロリと視線を左右して、獲物を定める風花。
すでに風花の前にはお皿が１０枚も重ねられている。

「・・・・・・・・・・・・。（汗）」

その小さな身体に潜む魔物の如き大きな食欲に呆然とする光樹。
会食が始まり幾ばくか経つが、こちらはまだ３皿目に突入したばかりである。

しかもそれでももうほとんどお腹が膨れていた。

「お姉ちゃんどうしたの？」

モグリと口に含んでいたお寿司をゴクリと飲み込むと、自分をジッと見つめている光樹に尋ねる。

「え、・・・あ、う、ううん、何でもないよ。」

「風花の食欲に呆れたんだとさ。」

言葉を上手く出せなかった光樹に変わって春斗が余計なフォローをする。

「な、なによぉ！・・・風花は別に・・・・（赤）」

男の光樹よりもバクバクと食べている事に気がつかされた風花。反論すべき言葉が見つからずに頬を染める。

「ち、違うよ春お兄ちゃん！・・・ぼ、僕は別に呆れてなんかいないよ！」

慌ててフォローのフォローをする光樹。

「ただ・・僕も風ちゃんぐらい食べられたら良いなって思っただけで・・・。」

それは結局食べ過ぎているという事を言っているのに他ならないのではないだろうか？

「それに風ちゃんもそんなことを恥ずかしがることないんだよ？・・・一杯食べて栄養つけたらそれだけ可愛い女の子になれるんだからね？」

「う、うん・・・だけど・・・。」

モノには限度があるような気も・・・。

「それに僕は一杯ごはんを食べる風ちゃんが大好きだよ。（ニッコ

リ）」

「えっ？（赤）」

いつもとは違う積極的な告白に虚をつかれる風花。

「一杯食べて大きくなって、可愛くなって、それで僕のお嫁さんになってくれるんでしょ？（ニッコリ）」

優しげに見守るような微笑みと共にそう問いかける光樹。

見た目が美少女の男の子のそんなセリフはかなり倒錯的である。

「う・・・・・うん。（真っ赤）」

光樹の微笑みをチラッと見ると、耳まで真っ赤にしてきゅぅっと俯く風花。

「・・・僕も一杯食べて風ちゃんに見合う丈夫な男の子になるから・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・お兄ちゃん。（潤）」

「だから・・・一杯食べよう？・・・・・・ね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・うん。」

しおらしく頷く風花。いつもの元気は乙女心ですっかり吹き飛んでいる。食欲も同じく。

「ところで光樹。・・・・もうその格好には慣れたか？」

沈んだ風花を気にすることなく、会話の流れを気にすることなく気楽にサンマを頬張り、そして飲み込んだ後の春斗が言った。

「え？・・・・・・あ、うん。・・・・・・・・・・な、慣れた・・・・・・・と思う。」

突然の振りにたどたどしく返事をかえす光樹。

「で、でもやっぱり・・・・まだ周りの人に見られたりすると恥ずかしいし、バレちゃうかもしれないと思うと凄くドキドキする。（赤）」

「そうか・・・・まあそれはそうだよな。男なのに女の格好したら恥ずかしいもんな。」

「う・・・・・・うん。（赤）」

「・・・・・その恥ずかしさが癖になっちゃったり？」

「し、してないよそんなの！（真っ赤）」

「ははは・・・・・でも良くやってくれてるよ、光樹。」

「・・・え？」

「元はといえば、俺が無理言ってそんな格好させてるわけだろ？・・・・光樹は本当は普通の格好をしたいのに・・・。」

「・・・あ・・・・・そ、その・・・。」

確かに余計な不安を抱えてこんな格好をするよりは男としての格好で普通に過ごしたいという気持ちがあるのは間違いない。

「・・・・・・・・ホント・・・ごめんな、光樹。」

そう言って、急に少しだけ憂いを秘めた表情を浮かべる春斗。やはり春斗も春斗なりに思うところがあるようだ。普段からイタズラ好きでおどけているが根はまじめなのだ。多分ね。

「そ、そんな！・・春お兄ちゃんが謝ることなんてないよ！」

春斗の切ない表情に胸を打たれた光樹は必死になってフォローを開始する。

「春お兄ちゃんは僕のことを心配してくれてるから！だからモエモエ学園を薦めてくれたんだし！！！」

「むしろ僕のために色々考えてくれてる春お兄ちゃんに凄く感謝してるから。だからこの格好でも全然平気だし気にしなくても良いよ！」

「そうか・・・・・・・・・。」

「うん、・・・・それに僕なんて春お兄ちゃんに何もしてあげれないから・・・・。」

「そんなことないさ。」

「ううん。だからこそ僕、春お兄ちゃんの言うことだったら何でも聞いてあげたいの。滅多に役に立てないから・・・・。」

おどけた態度とは裏腹にいつも精一杯自分たちの事を考えてくれている兄になにかしてあげたい。
自分が女装することで兄の心配がなくなるのなら、それぐらい全く構わないと思った。

「春お兄ちゃん・・・・・・他に何かしてほしい事があったら何でも言って。・・・・・僕、何でもするから。」

真摯で切実な表情を浮かべながら横にいる兄を見つめる美少女。

「じゃあ、お礼のキスをしてくれよ。」

台無しだっつーの。

「っ！！！？？？（真っ赤）」

「お礼のキスがあれば俺も頑張れるから。（ニヤリ）」

先ほどまでの憂いを全く粉砕したニヤケ顔で困惑の姫君を見つめる。
やはり彼の本質はこちらにあるようだ。

「あ、あの・・・・それは・・・（赤）」

困ったようにモジモジと身体を捩じらせて視線を右往左往させる光樹。
こんな人の多いところで、しかも手を握るとかいうレベルではなく接吻しろというのである。
戸惑うのも無理はない。

「ほら、ん～～～。」

そういって唇を光樹の方に突き出す。
なんかムカツク態度である。（笑）

「あぅ、・・・・えっと・・・・・・・ぅぅ・・・・・・・・・そ、それで春お兄ちゃんが喜んでくれるなら・・・。（赤）」

モジモジとして横目でチラチラと春斗を見て、ポソポソと呟いた光樹はお尻をずらして春斗に接近する。

「・・・・・・い、・・・・・・・・・・・・いくよ。（潤）」

肩がぶつかるぐらいまで近づき、小さな声でそう言うと、

まぶたを震わせながら待ちわびる春斗の唇へ、その可憐な唇を近づけた。

「（しめしめ。これで光樹の柔らか唇をゲットだぜ！・・・・・ん？・・・・・・ゲ！！！）」

近づいてくる美少女の初々しい唇に嬉々としたのも束の間、何気に斜め前から漂うプレッシャーに目を移した春斗。

（鬼眼）

そこには羅刹の子がいた。（涙）

某特務機関司令の得意な腕を組み顔半分を隠すあのポーズを形成しつつ、

目がとても１０歳の子供が出せるレベルではない殺気を発しているのである。

「あ、み、光樹。やっぱりキスは良いわ。あまり人がいる所でこんなことするのもどうかと思うしな。」

すでにここに来る前に、どうかと思うことをやりっぱなしであるが、羅刹の子が発する殺気には勝てなかったみたい。（涙）

「え？・・・・・・・・・・・・・・う、うん。」

ちょっと残念そうな光樹。

（くそぉ！・・・・・・・光樹も結構その気だったのに！・・・・・・でも風花を怒らせると始末がわるいからなぁ。）

「まあ今度、なんか頼みたいことがあったらその時に遠慮なく言わせて貰うよ。」

その時は必ず風花がいないときにしよう。そう心に誓う春斗。

「う、うん！・・・・・何でも言ってね！？・・・・・僕、何でもお手伝いするから！！！」

自分が役に立てる可能性が出てきたのできらめく表情で返事を返す。

「・・・ああ。・・・・・ありがとう。」

その純粋な態度にちょっと罪悪感を憶えるが、やはり背に腹はかえられないのであんな事やこんな事をお願いしようと思う春斗。

「ハル？・・・・・・・・・・分かってるよね？」

羅刹が聞くだけで死ねそうな声で問うた。

「もちろんだよ風花ちゃん！！！（キラキラ）」

物凄い爽やかなキャラで応える春斗。

しかし誰にも見えないテーブルの下では小鹿のように両足をガクガクブルブルさせていた。

「何の話なの？・・・・風ちゃん？」

二人のやり取りについていけない光樹。

「ううん♪・・・なんでもないよお姉ちゃん♪」

愛らしい天使のような表情で光樹に言葉を返す風花。春斗への態度とは１８０度違う。

「そんなことよりももっと食べよう！？・・・・お姉ちゃんはもう少し食べないとダメだよ！？」

まだ三皿しか食べていない光樹。

「そうだな、せめてあと二皿は食べて欲しい所だな。」

何とか復帰した春斗も同調する。

「う、うん、分かった。・・・・頑張るよ。」

もうかなりお腹が一杯だったが、二人の期待に応えるために再び蠢くレールの上にあるモノの選定に逡巡した。

ちなみにユリはひたすらずっとネギトロを食べてました。

「いやぁ～食ったなぁ。」

ポポンとお腹を叩き、歩を進める春斗。
その後をカルガモの子供のように付いていく三人の美少女。
全員が満足感を漂わせたことにより会計を済まし、店の外へ出た。

「ねぇ～～、これからどうするのぉ？」

お腹が一杯で歩くのも辛そうな風花が先頭を歩く春斗に問う。

「ん？・・・これからか？・・・・・・別になにもないけど？」

振り返り、一瞬の間をおいた後にそう応える春斗。
「もう光樹の買い物だって終わったんだろ？」
「・・・ええ。必要なものはすべて買ってあるわ。」
「ユリと風花はなんか買いたいものあるのか？」
「私はなにもないわ。」
「風花も別になにもない。」
「だったらもう・・・。」
「じゃあさ！遊園地に行こうよ！モエモエワンダーランドに！」
目をキラキラと輝かせてこれからすべき行動を提案する風花。
萌々市が誇る巨大遊園地、倒錯と背徳のテーマパーク、モエモエワンダーランドへ行こうと。
「遊園地？・・・お前なぁ・・・・・こんな中途半端な時間から行ってもしょうがないだろ。
遊園地っていうのはな。朝早くからソワソワして落ち着かない様子で起きて、
妙に気合いの入ったお弁当とお洒落で適度に動きやすい服を用意する。
そして何度も財布やらなんやらの持ち物をチェックして、ウキウキする気持ちを抑えながら車に乗り込む。
それで開園１０分前に到着してチケットを買おうとするけれども、

持ち物チェックをした時にうっかりと財布をテーブルの上においてしまって
チケットが買えずに仕方なく遊園地を眺めながら脇の駐車場で気合いの入った弁当を食う・・・・っていうのが醍醐味なんだよ。」
春斗流の遊園地の楽しみ方を懇々と説明する。
しかし話を聞く限り、絶対に面白くなさそうである。
「そんなの全然面白くないでしょ！！？？」
やはり風花様もそう思ったらしい。
「まあそれは冗談としても、どっちにしろ今日はダメ。行ったって大して遊べないだろ？
折角チケットを買うなら目一杯遊べるときに行かないとな。」
「でもぉ～～～。」
プリプリと不満の声を漏らす。
「近いうちにちゃんと連れてってやるから。・・・な？」
ポンポンと風花の頭を撫でながら諭すように言う。
「わかったわよぉ。（赤）」
頭を撫でられる気恥ずかしさからか頬を少しだけ染める風花。
「でも絶対連れてってよ？・・・約束だからね？」

「分かってるって。・・・・・・光樹も一度行って見たいだろうし・・・・・・な？」

「え？・・・・・・う、うん！・・・・・凄い小さい頃に行ったっきりだから行って見たいな。」

凄い小さい時っていうのが、どれぐらい小さいときなのか気になる所である。（手のひらサイズとかだとモエ！）

「そうか・・・・まあそういうわけだ風花。今度必ず連れてってやる。その時も四人で行こう。」

「うん！わかった！」

春斗の言葉に納得した風花。ごねる事も無く頷いた。

「それじゃあ結局これからどうするの？」

実のところこれからの事が全く決まっていない。

首をかしげながらユリが言った。

「そうだな・・・・光樹はどうしたい？」

「僕？・・・・・・僕は・・・・・・・・。」

「なにかやりたいことや行きたい所があるんなら遠慮なく言っていいぞ。」

「う、うん・・・・・・そういうのは一杯あるけど・・・・・・・・・・・・なんか色々と疲れちゃって・・・・。」

折角の兄妹の楽しいひと時に水を刺すようで申し訳ないと思ったのか、言いづらそうに呟く。
たしかに昼ごはんを食べて少し顔色が良くなったように見えるが、それでも華奢な身体から僅かに疲労が見え隠れしているような気がする。

「ああ、そうだった、ごめんな。お前まだ病みあがりだし、そんな格好して精神的にも疲れてるよな。気が付かなくてごめん。」

「あ、いいよそんなの！・・・僕もお昼ご飯を食べて一息ついたら急に疲れたなぁって思っただけだから！」

「まあこれからはいつでも４人で買い物にこれるわけだし、今日は車で来てるついでに一週間分の食材を買って、それで帰るか。」

「そうね、それは助かるわ。男の人の手がいるモノも買えるし。」

「風花もそれで良いだろ？」

「うん、良いよ。お姉ちゃんが辛い思いしてたら風花も楽しくないから。」

作者的にも少しごねると思ったが、意外に素直に応じる。
やはり光樹の身と自分の欲を天秤にかけると光樹の身の方が大事らしい。
これが仮に春斗の都合であれば思いっきり自分の遊び欲が重いのであろうが。（笑）

「ごめんね風ちゃん。」

悲しそうな顔で風花に謝る。

「ううん！全然気にしないでお姉ちゃん！これからは毎日お姉ちゃんと遊べるし、今日も一緒に買い物できて十分楽しかったから！」

「ありがとう風ちゃん。・・・僕も一緒に買い物できて楽しかったよ。また一緒に遊びにこようね。（ニッコリ）」

「うん！もちろん！」

零れるような笑顔で答える。

「じゃあ、食材買って帰るか。」

「それでおやつはいくらまでなの！？」

「う～～ん、今日は奮発して５００円まで許してやるよ。」

「バナナは？」

「別でＯＫ！」

「やった～～～！！！・・・・春斗大好きぃ！！！」

久しぶりの魅惑的なおやつ条件に心が弾み、春斗に抱きついてしまう風花。

「ははは、・・・調子の良いヤツだなお前も。」

苦笑を隠しきれないながらも、優しく風花を受け止めてやる春斗。
（巴投げをしたら面白かったかもと思ったのは秘密だ。（笑））
ちなみにいつものこのような買い物の場合、３００円でバナナ代込みである。（笑）

「光樹も５００円とそれ以外にフルーツを一種類買っていいぞ。あ、でもマスクメロンとかは無理ね。」

「う、うん。」

それほどおやつとかは食べないので５００円分もいらないかなぁと思う光樹。

「あ、そうだ！・・・ユリ姉ぇ！・・・エリンギ買ってね！」

とても大事なことを思い出した風花。
意外なことであるが、実は風花はエリンギが大好物なのである。
きっと何か重要なキッカケがあったのだろう。

「ええ、もちろん。（ニッコリ）」

「やった～～～！！！・・・ユリ姉ぇ大好きぃ！！！」

今度はユリに抱きつく風花。
優しく抱きとめるユリ。

「よし、そうと決まれば早速行くか。」

「おおー！！！」

一人だけ物凄いテンションが勝手に突撃して行った。

「おい風花・・・・・車はこっちの方だぞ・・・・・・・あ、転んだ。」

勢いよく走り出した途中で出鼻をくじかれる形で飛び出した春斗の声に思わず足をよろめかせる風花。

ペタンという音を地面で奏でる。

「風ちゃん！！！」

それを慌てて助けに行く光樹。

「お、おい光樹！・・・お前も十分トロイんだからそんなに急ぐと・・・・あ、やっぱり。」

お世辞にも運動神経が良いとはいえない光樹が冷静さを失い走り出すとどうなるか・・・・・まあこうなるよね。

「光樹！」

すると今度はユリが連鎖反応のように声を出す。

「いや、お前までやらなくて良いから。」

「・・・・・・・・・・そうね。」

「ああ。」

同じく転んでクスクスと笑い合っている風花と光樹を見ながら、春

斗とユリは頷きあった。

「おやすみなさい、春お兄ちゃん。」

「ん、ああ、おやすみ光樹。」

目をごしごしとこするパジャマ姿の光樹にビール片手にニュース番組を見ていた春斗が声を返す。
楽しかった家族でのショッピングが夢のように過ぎ去り、軽い夕食も済み、すでに子供が寝る時間になっている。
風花はすでに光樹のベッドで勝手にご就寝中。

「おやすみなさいユリお姉ちゃん。」

「ええ、おやすみ光樹。（ニッコリ）」

春斗の隣でズズっとお茶を啜っていたユリも声を返す。

「明日からついにアレなわけだが・・・・・大丈夫か？」

「う、うん、ちょっと緊張してるけど・・・・・・・大丈夫。」

「そうか・・・今日一日女装したおかげでますます可愛くなったしな。（ニヤリ）」

「・・・な、なに言ってるのさ春お兄ちゃん！（赤）」

「ははは、まあ絶対に大丈夫だ。むしろ学生生活を満喫できるからな。俺が保証する。」

「う、うん。」

「だから安心して今日は寝ろ。明日に備えてな。」

「うん、わかったよ、おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

「おやすみ光樹。」

「うん、おやすみなさいユリお姉ちゃん。」

再度春斗とユリに言葉を返す光樹。そのままリビングに背を向け二

人の視界から消えていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・光樹、本当に大丈夫かしら？」

二人だけになったリビングで、テレビから聞こえるキャスターの声をＢＧＭにしながらユリが呟いた。

「ん・・・まあなるようにしかならないからな。・・・それに俺のクラスの子は良い子が多いし、光樹も男にしておくのがもったいないぐらい可愛くて良い子だから変なことが起こるなんてないさ。」

「・・・・・・・・・・・・・・そう・・・・・・・よね。」

「ああ。・・・それよりも・・・・光樹がこのシチュエーションでどんな反応を見せて、どんな行動を取るのか、そこのほうが気になる。困りが顔の光樹が目をウルウルさせて俺に助けを求めてくるのとかすげぇ可愛いと思うし。（ニヤリ）」

そう言って悪戯っ子の顔をする春斗。
それを見て少し呆れた表情を浮かべるユリ。

「春斗って・・・・・・・やっぱり基本的に性格悪いわよね・・・・・。」

「ははは、そうだな。自分でもそう思うよ。」

悪びれもせずにユリの言葉を肯定する春斗。
そのまま漏らした苦笑をつまみに一気にビールを煽った。

「・・・・・・・・・・・・・でも・・・・・出来ればその時の光樹を私も見たいわ。」

きっと困り顔の子犬のように愛らしいであろう光樹の表情を想像したユリが思わずそう呟いた。

第七話（後書き）

ダラダラと買い物編を続けてしまいましたが、次はようやく転入編です。ちなみに自サイトでは話の終わりにキャラとの対談形式でそのキャラの紹介等をしております。誕生秘話や裏設定などが赤裸々に書かれていますので興味があればｈｔｔｐ：／／ａｎｏｎｅｍｏｅ．ｈｐ．ｉｎｆｏｓｅｅｋ．ｃｏ．ｊｐ／までどうぞ。

八話

「・・・・・・・・・・・光樹、そんなに緊張するなって。」

後ろでカチカチに固まっている光樹に気軽な口調で声をかける春斗。

「・・・・・・・・・・う、うん。」

ぎこちなく頷く光樹。

もちろん緊張が解けている様子は一切ない。

「いいか？・・・まず、俺が入って転校生が来ることを伝えるから。それでその後にお前を呼んで・・・そしたら入って来い。」

「・・・・・・・・・・う、うん。」

ロボットのような機械化された動作で頷く。

「ま、そういった緊張感も良い勉強になる。頑張れよ。でも学校でのこんな経験なんて初めてだから、本当に辛そうだったらちゃんと助けてやるから安心しろ。」

ポンポンと頭を撫でて光樹を安心させようとする春斗。

「う、うん・・・・・・・・ありがとう春お兄ちゃん。（潤）」

春斗の言葉に感激し、瞳を潤ませる光樹。

「おいおい、こんな所で半べそかいてる場合じゃなぞ。（笑）

ま、取り合えず何事も経験だ。じゃあちょっと行って来るからな。」

「あ、待って！」

「ん？・・・どうした？」

「・・・・・・・・・僕・・・変じゃ・・・・・ない？（赤）」

心配そうに自分の格好を見せる。
この年代の女の子の魅力を一層引き立てる爽やかな制服、
清純と愛らしさがバランスよく配合されたセンスの良い制服を着用している。
元々光樹の容姿自体、可愛らしく整っているし、雰囲気も優しくもあり儚くもある感じなので
およそ男とは思えないほどに美少女ぶりを発揮している。むしろ男でも作者的にはいける自信はある！！！

「大丈夫、・・・・可愛いよ。（ニッコリ）」

女殺しの声と表情でそう言って、光樹を安心させる。

「そ、そうじゃないよぉ。（真っ赤）」

からかわないでよぉバカぁ。
と恥ずかしさがこみ上げてきて春斗の胸をポカポカ叩く。

「ははは、大丈夫だって、絶対にバレないから。ま、安心しろって。」

そういって廊下での会話に区切りをつける春斗。

ガラガラっとドアをスライドさせ、光樹が編入する２－Ｅクラスに入っていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

光樹は教室のドアの向こうに飲み込まれていく春斗の背中を心細そうに見つめていた。

ガラガラガラ！！！

「起立。」

教室のドアが開いたと同時に、朗らかでありながらもキリッとした声が響く。

春斗は当り前のようにスタスタと教室を横切り、壇上へ立つ。

「礼。」

それを待ち構えていたかのように、タイミングよく声がかかる。

「「「おはようございまぁす♪♪♪」」」

号令の一瞬の間の後に、甘いお菓子のような黄色い声が教室を埋め尽くした。

「はい、おはよう。・・・・今日も一日よろしくな。」

バシリとスーツで決めた二枚目の春斗が、けだるそうに応えた。

「着席。」

「え～～～、今日からまた長い長い、だるいだるい一週間が始まるわけだが、みんな週末は楽しく過ごせたか？」

「はい！・・・は～い！・・・楽しめましたーー！！！」

「そうかそうか、・・・それはなによりだ。・・・・・で、何してたんだ？・・・・恋（れん）」

春斗の言葉に勢いよく反応した（映像上）金髪のツインテールの女の子に問いかける。

「先生とデートしてましたー！！！」

「はいはい、言うと思ったよ。・・・・俺も楽しかったよ。」

どうやら決まりきっている答えだったらしい、その返答をあっさり流す春斗。

周りもいつものお約束にクスクスと声を漏らす。

「まあそんなわけで皆楽しく週末を過ごした事と思うが、そんな前振りと一切関係ない重大な情報を提供したいと思う。」

壇上の机に両手をついて生徒全員をぐるりと見渡す。

「実はこのクラスに転校生がくる。」

ザワザワザワザワ！！！

その言葉で隣の生徒と話すものが続出する。

「取り合えず、待たせて緊張感を煽るのも可哀想だから先に登場してきてもらおう。光樹、入っていいぞ。」

「は、はい！」

ドアの向こうからビクついた声が聞こえる。

ガラガラガラ・・・・

弱弱しく頼りなく、ゆっくりとドアがスライドする。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・すぅ～～はぁ～～～。

そして一瞬の間の後、小さく聞こえてくる深呼吸の音。

トコトコトコトコ・・・。

教室の全ての目が、ドアの向こうから現れる生徒に注目した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・。（赤）」

緊張と突き刺さる視線への羞恥で頬を染め、下を向きっぱなしで壇上へ近づく。

そして春斗の元に近づき、かなりの不安が心を支配しているようで、春斗の暖かさが感じられるぐらいまで寄り添おうとして肉迫する。

「というわけで紹介しよう。今日からお前達と一緒に青春を謳歌することになった可憐な美少女、庭乃光樹ちゃんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。（赤）」

春斗の言葉が上から聞こえてくるが、お構い無しにガチガチとしながら俯き続ける光樹。
しかもわざわざ「ちゃん」付けする所が光樹の羞恥を煽る。

ザワザワザワザワ・・・。

生徒達の方もお構い無しに隣や後ろの者達とヒソヒソと話し始めた。
理由は整った容姿と華奢な雰囲気からくる凄まじい美少女感に圧倒されたというのもあるのだが、
ある言葉がキッカケとなったのだ。
その言葉とは・・・。

「まあそういうことだ。・・察しの通り、こいつは俺の妹。」

春斗がそのざわめきに答えを出した。

「じゃあ、まずは光樹、自己紹介してみろ。名前と挨拶ぐらいでいいから。」

「は、はい！・・・・・・・・あ、・・・・・えっと・・・・・・・・・・。」

俯いていた顔を上げ、チラッと前を見る。

ジジジジジジジジジジジジジジジジジジジジジジジ！！！

と音が聞こえそうなほどに注目されている自分。

「っ！？（赤）」

慌てて下を向く。

注目されている緊張感と、正体が見破られているのではないかという恐怖感で一杯になる。

「・・・・は、はじめまして！・・・・・・庭乃・・・・庭乃光樹です！・・・・・・な、仲良くしてください！（真っ赤）」

出来る限り身体を小さくしながら、今出来る限りの大きな声で自己紹介を済ます。

凄まじい緊張感に包まれたが何とか任務をこなす事が出来た。

「はい、拍手ぅ！！！」

そういって春斗がパチパチと拍手をして、生徒を促す。

パチパチパチ！パチパチパチ！

生徒達から盛大な拍手が送られた。

「・・・・・・・・ぁ・・・。（潤）」

その暖かい気持ちに感動した光樹は、瞳を潤ませながら生徒達を見る。

みんな優しい微笑みを湛えて自分を見ていた。（光樹視点）

「よ、よろしくおねがいします！（ペコリ）」
光樹はそういって深々と頭を下げた。

「えー・・・光樹は今までずっと病気を患っていて入院生活を送っていた。だからこういう風に学校へ通ったことがないんだ。
今回、ようやくこうやって学校に通えることになって・・・それを光樹は凄い楽しみにしていた。・・・な？」

「う、うん。」

「だからお前達にはその期待が現実のものであるように、光樹に感じさせてやってほしい。
学校が楽しい所で、ここに来て良かったと思えるようにしてほしい。
ようは仲良くしてくれってことだ。」

「担任として・・・いやこいつの兄貴としてお前達に頼みたい。よろしく頼む。」
そういって春斗は自分の教え子達に頭を下げた。

「春お兄ちゃん。（潤）」

春斗が自分のためにここまでやってくれる事に物凄い感動する光樹。今なら春斗のために何でも出来るし、何をされても抵抗さえしなかっただろう。
普段から何をされても抵抗しないけどね。

ザワザワ・・・ザワザワ・・・ザワザワ・・・。

生徒達も春斗が頭を下げたことに驚いた。
普段からおちゃらけた印象が強い（やるときはちゃんとやるが）春斗が真摯な表情で頭を下げたのだ。
驚きもしたが、同時に好感度もかなり上がった。これで光樹が苛められる可能性はほとんど無くなったと言っていいだろう。

「もし仮に光樹を苛めたりするヤツがいたらアレだ。高等部へ上がれないくらい低い内申点をつけるからそのつもりで。（笑）」

頭を上げた途端にそんなことを言って余韻を台無しにする。しかも私情バリバリである。

「「ええーー！！！」」

「ええーー！！！じゃねぇよ。・・・苛めなきゃ良いんだよ。それだけで良いんだから簡単だろうが。」

「そういうわけでよろしく頼むぞ。・・・・じゃあ、光樹の席は・・・。」

そういって辺りを見渡す。
視界の一部で何度もピョコピョコと手が上がるのが見えるが、
「宵里(よいのさと)の隣にしよう。ぶっちゃけ最初から決めてたけどな。良いだろ宵里。」
そのピョコピョコを無視して春斗が座席を指定する。
ええー！！！
という声とともにそのピョコピョコは萎んでいった。
「はい。（ニッコリ）」
春斗の指名に声を上げて応じる女の子がいる。
艶やかで長い黒髪をお姫様カットで綺麗に整え、美しく清楚に整った容姿をした女の子が。
「というわけで光樹、あの女の子の横がお前の席だ。宵里は学級委員長でもあるし、性格も良いから
知りたいことや困ったことは何でも聞け。相談に乗ってくれるぞ。
なぁ宵里？」
「はい、もちろんです春斗先生。」
そういって女の子は微笑みながら頷いた。
「どうもな。・・・よし光樹、あそこに座れ。」
ポンと光樹の背中を押す。

「あ、う、うん。」

押し出され歩き出す形になった光樹は、ゆっくりとその女の子がいる席に近づいていく。

「はじめまして庭乃さん、私、宵里梅香（よいのさと・うめか）と言います。」

「は、はじめまして！・・・庭乃光樹です！・・・・仲良くしてください！（赤）」

「もちろんです。こちらこそよろしくお願いしますね、庭乃さん。」

「あ、光樹で良いです！」

「では私も梅香で良いですよ。・・・他にも色々な呼ばれかたしますけど、どうぞお好きなように・・・。」

「は、はい・・・・じゃ、じゃあ・・・・・梅香ちゃん？（赤）」

「なんですか？・・・・光樹さん。（ニッコリ）」

「えぇ・・・あ、なんでもないです。（赤）」

ただ名前を呼んだだけなので特に用件は無いよね。

「ふふふ・・・・でも家族以外で梅香ちゃんって言われたのは初めてです。」

「あ、ご、ごめんなさい。（青）」

折角仲良くなれて天にも上るぐらいに嬉しかったのだが、その一言で血の気が引く。
風花などを例に取れば分かるように、同年代やそれ以下の子供に対しては親しみを込めてちゃん付けする傾向が光樹にはあった。
その癖がつい出てしまったのだ。

「いえ、謝らないで。・・・・嬉しかっただけですから。」

そういって人を安心させるような微笑みを浮かべる。

「つーか取り合えずお見合いはその辺で良いだろう？・・・・後の話はＨＲが終わった後にゆっくりやっていいから。」

その言葉にクラス中が笑いに包まれる。

「そうですね。すいません。」

「・・・・・・・・・・ぅぅ。（赤）」

全く動じない梅香と動じすぎている光樹。
対照的である。

「ねぇ、庭乃さんって趣味とかあるの？」

「あ、うん・・・そ、そんな趣味って言えるものはないけど・・・・・本を読んだりピアノを弾いたりするのは好きかな。」

「へぇ～・・・・ピアノ弾けるんだー！今度弾いてくれる？」

「う、うん、良いよ。」

「光樹ってどういう字を書くの？」

「あ、えっと・・・ひかりに樹木のじゅって書いて・・・光樹って読むんだ。」

「へぇ～・・・いい名前だねぇ。」

「あ、ありがと。（赤）」

「庭乃さんって凄い可愛いよねぇ？・・・・彼氏とかいるの！？」

「か、彼氏！？・・・・い、いないよぉ！（赤）」

自分は内緒ではあるがれっきとした男である。

そんな自分に彼氏なんているはずも無いし作る気なんて全くないのだ。

「きゃあ！赤くなってるぅ！可愛い！」

しかしそんな光樹の本当の性別に気付いていない女子生徒は俯く光樹を見てキャピキャピ盛り上がる。
ＨＲが終わった途端にこの黄色い人だかりである。

（・・・・・・・・な、何とかバレてないみたい、僕の正体。・・・でもあまり顔を上げられないよぉ。）

周りからの鋭い視線にヒヤヒヤしながら質問に答えていく。出来るだけ顔を上げないで正体を見破られないようにするがそれでも顔を完全に見られていないという事はないので、ごく普通にその容姿を堪能されてしまっている。

「でもさ！まぢで可愛いよね！やっぱり庭乃兄妹の美形伝説って本物だったね。」

そしてそのごく普通に見られていた結果がこの言葉である。

「美形伝説？」

「そう、お兄さんの春斗先生がまず凄いでしょ？・・・それに高等部のユリ先輩。そして初等部の風花ちゃん。
三人ともすごい美形だから、この学校じゃかなりの有名人なんだよ！？それぞれ非公式にファンクラブが出来てるらしいし。」

風花が聞いたら飛び跳ねて喜びそうである。ただしその構成メンバーはかなりのそれ系であることは秘密だ。（涙）

「そ、そうなんだ・・・。（汗）」

「でもこの調子だと庭乃さんのも出来ちゃうんじゃないかな？

なんか他の兄妹と違って庇護欲を煽る魅力とかが受けそうだし。
可愛くて儚い感じが守ってあげたいっていう気にさせるのよねぇ。」

「そ、そんな・・・・。」

一応、男である自分が女の子に守ってあげたいと思われていることにショックを受ける。（笑）
そもそもＨＲ後のこの凄まじい質問攻めの活気に圧倒され気味の光樹。あきらかに弱弱しさが全開に出ていた。

「つぅあー！！！」

「「「きゃあ！！！」」」

そんな弱弱しく圧倒されている光樹の前に、その光樹を囲んでいる人だかりを蹴り、吹き飛ばして登場する人物が現れた。
先ほど光樹の席を決めるときに手を何度も挙げてアピールしていた金髪ツインテールの女の子である。

「アンタ達邪魔ぁ！・・・光樹はアタシの親友なのよ！」

「ええ！！？」

突然の事に、突然の宣言に驚く光樹。

「はじめまして光樹。私は水沢恋。恋ちゃんって呼んで良いわよ。」

「・・・・は、はぁ。」

「これから仲良くしましょう！？・・・・すでに私達は親友よ！」

がしりと光樹の両手を掴んでそう宣言する。

「・・・・は、はぁ。」

「早速今日から遊びに行くわね！！！ね！？ね！？いいでしょ！？」

「は、は・・・・・い・・・。」

「やったぁ！・・・・絶対よ！絶対だからね！」

「・・・・・・・・（コクコク）」

恋の勢いに呑まれて頷くことしか出来ない。

「もうやめなさい恋。会ったその日に相手のお家を訪ねるのは失礼です。

それに光樹さんを利用するために友達になるなんて最低なんだから。」

二人の一方的なやり取りを見ていた梅香が言葉を差し込む。

「え？」

光樹は何がなんだかわからずに首をかしげる。

「ごめんなさい光樹さん、恋は春斗先生の事が好きだから光樹さんと友達になれば会いにいけると思っているんです。」

「・・・・・そうなの？」

「ち、違うわよ！確かにそれもあるけどアタシは純粋に光樹と友達になりたいのよ！」

タラタラと汗を流し明らかに動揺している様子の恋。

ジジジジジジジジジイイ～～～

いくつモノ視線が突き刺さる。

「う・・・・・・・。」

後ずさりする恋。初登場でありながらいきなりピンチ！

「あ、あの・・・・・でも・・・・僕ともちゃんと友達になってくれるんだよね？」

そんな微妙な空気を察していないのか、光樹が言葉を発した。

「え？・・・・ええ、もちろん！」

「なら僕は嬉しいから・・・・・（ニッコリ）」

たとえ自分の裏にあるものが目的であっても、友達になってくれるならそれだけで嬉しかった。

初めて経験するスクールライフだから、一緒にいろんな経験が出来る友達が一杯欲しいと思ったのだ。

「・・・・・・・・・・。（赤）」

その微笑みを見て恋は何故か頬を染めた。

「では今回は光樹さんの優しい御心に免じて。（ニッコリ）」

そういって微笑み恋を見る梅香。

「わ、わかったわよ。・・・今日のところはまだ行かないわ。もっと仲良くなったらすぐに行くわよ！？・・・良いでしょ？」

完全に毒気を抜かれた恋はそういってビシリと光樹に指を突きつけた。

「うん。・・・・良いよ。（ニッコリ）」

「よぉし！じゃあ改めてよろしくね！」

「う、うん、よろしく。」

キンコーンカンコーン・・・。

ここでタイミングよく一時限目の始まりを告げるチャイムがなった。

「ち！・・・折角これからが本番だっていうのに！・・・・仕方ないわ、次の休み時間に更なる交流を深めましょ？」

「う、うん。」

「じゃあ、そういうことで。」

シュタッと去っていく恋。

「もう、・・・本当に困ったものですね、恋のあの性格は。」

「す、すごく元気な子だね。（汗）」

「ええ、それだけが取柄ですから。それに名前通り凄い惚れ込み易い性格で、恋に恋しているという感じなんです。それでいつも春斗先生に・・・。」

「あ、でも凄い努力家でもあるんですよ？・・・先生に見合う女性を目指して日々色々な努力をしているらしいですし。先生が担当している数学だけなら学年1位の成績ですから・・・。それにあんな積極的な癖に良い点数をとって春斗先生に褒められた時なんて、顔を真っ赤にして俯いて・・・ネジの切れたお人形のようになってしまって・・・・・クスクス。」

その時の事を思い出したのだろう。思わず口元に手を持っていき、声を漏らす。

「そうなんだぁ・・・。・・・凄い良い人なんだね。」

「ええ、今日は少し暴走してしまいましたが、根は優しいし思いやりのある女の子です。」

「・・・・そっかぁ、・・・・・・・へへ、友達になれて嬉しいな。」

「そうですね。（ニッコリ）」

ガラガラガラ！

話の区切りにちょうど授業の始まりを告げる扉開き音がなる。
「起立！」という声が上がり、光樹にとって初めての授業が開始されたのであった。

「ところで私の名前の由来が聞きたいでしょ！？」

一時間目の授業が終わると同時に恋が飛びついてきた。

「え？」

初めての授業の余韻に浸っていた光樹は寝耳に水状態で聞き返す。
「だから私の名前の由来よ。恋(れん)、なんて名前珍しいでしょ？」
「う、うん・・・・・・・そうだね。」
「でしょ？・・・・・由来聞きたい？」
「う、うん・・・・・・・そうだね。」
「宜しい。では聞かせてしんぜよう。」
実は断ったとしても必ず言うつもりだった。
何せ初めて顔をあわせたこのクラスの人間一人ずつにも由来を言いまくっていたのだから。

「実は私のママとパパはとてつもない大恋愛の末に結婚したのよ。
それでその時の運命的な出会いによって授かった私達にもその恩恵を与えようと思ったらしいの。
その結果、長男の名前が「大」そしてその妹である私が「恋」、ふふふ・・・それで私の弟が「愛」になったのよ。」
「・・・・・お、弟さんの名前・・・・・・愛ちゃんなの？（汗）」
「キャハハハハ！！！・・・そうなのよ！・・・・・・大ときて恋ときたら次はもう愛しかないでしょ？
生まれてきたのが男だったけど、今更その運命を変えるわけにはいかないってことで愛になったのよ！（爆笑）」

悲しい親をもった子供である。（涙）

「名は体を表すとかなんとか言うじゃない？・・・いま小４なんだけど実際、愛って顔してんのよねぇ。・・・キャハハハ！」

三キロ先の他人事のように無責任に笑い倒す恋。

両手でお腹を抱えその場にうずくまる。・・・・・・・そこまで笑えるものなのだろうか。（汗）

「近いうちに会わせてあげるわ！・・・絶対に面白いから！」

「う、うん。」

面白いかどうかは分からないが恋の圧倒的な勢いに頷くしかない光樹。

「あ、そうだ、忘れてたわ。一応、もう一人紹介するのがいるんだった。」

「そうね。奈々を紹介しないといけないわね。」

梅香の頷きをまたずに恋が後ろの方の席に歩いていく。

「奈々・・・・さん？」

「はい、私と、恋と奈々の三人で良くお話をしていますので・・・。」

「あ、そうなんだ。」

「はい、ですから宜しければ奈々ともお友達になって上げてください。
もちろん他のクラスメイトとも仲良くなって欲しいですが。」

「うん、僕も友達が一杯いてくれるのは嬉しいよ。・・・実を言うと友達が出来るかどうか不安で不安で眠れなかったんだ。
春お兄ちゃんは俺のクラスは良い子が一杯だからすぐに友達ができるって言ってくれたんだけど・・・。
でも本当に良い人が一杯で・・・・・梅香ちゃんもすごく良い人で友達になれて良かった・・・・。（赤）」

安堵と喜びで頬を染めながら梅香を見つめる光樹。
かなり可愛らしい仕種である。

「そこまで言って頂けて私も嬉しいです。・・・・私達、きっと良いお友達になれますね。」

梅香も嬉しそうに微笑みながら「ね？」って感じで小首を傾げてみせた。

「うん！」

「奈々ぁ～～・・・起きろ～～～。」

机に上半身を多いかぶせている女の子の頭をペシペシと叩く恋。

「うぅ～～・・・なんだよぉ。・・・・ボクは眠いんだよぉ！」

叩かれるのが嫌なようだが本格的に動くのがメンドイらしく、微妙に揺れることでそれを回避しようとする。

しかしそれは全くの無駄な足掻きであった。

「またゲームのやり過ぎなの？」

呆れたような声色で恋が問いかける。

「全職業コンプリートのためのレベル上げしてて徹夜したんだよぉ・・・だから凄い眠いのぉ・・・・・・寝かせて。」

「アンタまたそんなしょうもないことを・・・・。」

「しょうもなくないよぉ・・・・・・ゲーマーが必ずやらなくてはいけない最低限のマナーなんだよぉ。」

「はいはい、分かったから。だから取り合えず起きて！」

「あと１０分だけ寝かせて・・・。」

「また授業始まるっつうの！・・・起きんかい！」

あんまり堪忍袋の緒が太くないらしい恋。

奈々と呼ばれる女の子の髪の毛を掴み、拷問中のように思いっきり引き上げる。

「いたたたた！・・・な、何するんだよ！・・・このバカレン！・・・あ、ちょっとハガレン（鋼の錬金術師のこと）に似てるな・・・ってそうじゃなくて！」

「相変わらず素敵な頭の中してるわね。」

「うるさいよ。そんなことより何だよ。こんな無理矢理ボクを起こして・・・。」

「アンタ、ずっと寝てたから気付いてないでしょうけど、転校生が来たのよ。」

「え？・・・そうなの？・・・・どこどこ？」

急に興味を覚えたようで辺りをキョロキョロと見回す。
早速、目の前の奥のほうにそれらしき人物が写る。その人物はトコトコと歩いてきて微妙な緊張の表情を浮かべた。
綺麗に整ったショートカットの黒髪に優しそうで可愛らしい容姿をした女の子が歩いてきている。

「あ、あの・・・僕・・・・・に、庭乃光樹です。・・・・よろしくお願いします。」

女の子はそういってペコリとお辞儀をした。

「・・・・・・・・・え・・・・・・・ええーーーーー！！！！！！！」

そのお辞儀に素っ頓狂な大声を上げる奈々。

「あ・・・・え？・・・・・・・・・え？・・・・・・・僕・・・・・なにか・・・・？」

自分は普通の挨拶をした筈なのに、目の前の黒髪のショートカットで好奇心旺盛な小動物のような可愛らしさを持つ女の子はいきなり自分を見て大声を上げたのだ。一体なにがまずかったのだろうか？

「・・・・・・・・・き、君って・・・・・・・ボクっ娘・・・・・・なの？」

「ぼ・・・・・・ボクっ娘？」

「そう！」

もちろん女の子の言いたい事がわからない。

「自分のことを指す時にボクっていう子の事だよ！」

「・・・・・・あ、・・・・・そ、そうだね。・・・・・僕は・・・・僕って言ってる・・・・ね。」

今まで生まれてこの方、ずっと僕という人称を使ってきた。
自分は男であるし、私とかアタシとかいうのも違和感があるし恥ずかしい。
今更、光樹はねぇ・・・とかも言いたくも無い。、（笑）
かといって俺っていう性格でもないし、こんな女子中でいきなり俺

はまずいであろう。
今の光樹の性格と容姿のギャップで可愛らしい事は可愛らしいのだが。

「な・・・なんてことだよぉ・・・・・・・ボク以外に・・・新しいボクっ娘キャラが転校してくるなんて・・・。（絶望）」

なにもそこまでというぐらいに落ち込み始める女の子。
ガクリと膝を落とし床に手を落とす。

「また始まった。（汗）」

恋が呆れたように言った。

「気にしなくて良いわよ光樹。・・・奈々はいっつもこんな感じで訳分からない事言って一人で盛り上がるヤツだから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

呆然としてただ奈々を見ている光樹。

「折角・・・このクラスでオンリーワンなボクっ娘キャラとして存在していたのに・・・・・。し、しかも髪型とかも似てるし・・・・良く見れば顔も似てるじゃないか・・・。」

「髪型っていうか髪の長さは同じくらいだけど・・・あんたのショッパイ顔とは似てないわよ。」

「誰がしょっぱい顔だよ！・・・・可愛いじゃないか！・・・・こ

れでも父さんにはいつも、奈々は凄い美人さんだねぇって言われてるんだぞぉ！」

それは言い訳になるのか分からないが、実際特にしょっぱい顔をしているというわけではない。
美人というよりは男勝りに元気な活発美少女という感じの容姿をしている。
外見的にはユフィ・キ〇ラギをイメージして頂ければ幸いです。ちなみに奈々ちゃんの本名は如月奈々です。（笑）

「はいはい、わかったわよ。奈々ちゃんはとっても美人ですねぇ。」

「な、なんか凄いムカツクよ・・・。・・・・・っていうかそれよりも君！」

「は、はい！」

「君のボクは僕であって、ボクではないよね！？」

「・・・・・・・・・・・えっと・・・・・。（汗）」

何がなにやらわけがわからない様子の光樹。
確かに文章で見れば意味は分かるが、口頭ではひたすら早口言葉のように僕を連発しているだけである。

「だから・・君の僕っていうのは漢字の僕であって・・・・・・ボクが使っているボクはカタカナのボクってことだよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・は・・・・・・はあ・・・・・・。」

「そうなんだね！？」

「・・・・・・・・・は、はい。」

違いが良く分からないが、期待の篭った目で見られると頷くしかない。

「良し！・・それならば良し！！！」

だがそれで十分納得したらしい。

「ちょっと辛いけど・・・これでなんとか住み分けは出来たよ。」

ふぅ～とオデコの汗を拭う仕種をしながら一安心と胸をなでおろす。

「じゃあ改めてよろしく！・・・ボクは如月奈々。・・・・趣味はテレビゲーム全般だよ。ゲームに限らず楽しそうなことは何でも大好きだけど。」

「あ・・・よろしくお願いします！・・・・僕は・・・庭乃光樹です！・・・趣味は本を読んだりピアノを弾いたりすることです。」

「・・・・・・・・・・・・・・・庭乃？・・・・・・・・・・・・・・・どっかで聞いたことがあるような気が・・・・・。」

「何言ってるのよ。春斗先生の・・・・。」

「あ、そっか！・・・・・じゃあ君って・・・・先生の・・・・娘さん？」

ポカッ！

「いたぁ！・・・な、なにするんだよバカレン！」

「春斗先生は独身よ！・・・それに先生の子供を生むのはアタシなの。・・・キャ！・・言っちゃった♪」

「どうせならあの世に逝っちゃえよ。・・・・・・じゃあ君は先生の兄妹なの？」

「う、うん。」

「そっか・・・・・・・庭乃光樹・・・・・・・・・・・光樹？・・・・・・・・・・うぅ～～～～～ん。」

光樹という単語に何か心当たりがあるのか、そのゲーム以外にはほとんど使わない頭を捻る。

「なによ？・・・・・なんか知ってんの？・・・・・・・知り合い？」

恋が興味深そうに聞く。この友人と新しい友人に何かしらの接点があるのなら一体どんなものなのかが気になる。

「うぅ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～ん・・・・・へへ・・なんでもない。」

一瞬何かを閃いたような素振りを見せるが、すぐに表情を戻し任務失敗を笑って誤魔化すような態度を取る。

「・・・・・・・・・・・・・・・あ・・・・・・アンタに期待したのが間

違いだった・・・・・・。」

肩透かしをくらった恋は、その透かした肩を大きく落とした。

「ははは・・・・とにかく宜しくねミッキー！」

「ミッキー！！？」

「あ、イヤだった？・・・・・じゃあミッちゃん、・・・・ミツキチ・・・・・・光樹の中の人・・・・とか？」

「・・・・な、なんでもいいけど・・・中の人っていうのはちょっと・・・・・（汗）」

確かにあたかもチャックが付いているような呼び名はご遠慮願いたい。

「そう、じゃあ気分に応じて呼ばせてもらうよ。・・・ふふふ。」

何か面白い事を楽しい事を見つけたような微笑みを浮かべながら光樹の肩をポンポン叩く。

「・・・・・・そっかぁ！・・・・・・・これはこれは・・・・・・・はははは・・・・どうしよう♪」

そんな奇天烈な独り言を呟きながら教室を出ていく奈々。

「アイツ・・・どうしちゃったのかしら・・・？」

楽しく壊れだしている奈々を見て、心配しているのか呆れているの

か分からない声色でそう呟く恋。

「・・・・？」

光樹にもそれはさっぱり分からなかった。

「ああっ・・・・次は体育なのね。・・・・・・面倒くさ〜〜い。」

三時間目の授業が終わり、四時間目は体育の時間らしい。
心底たるそうな声を出しながら、机の上にのっぺりとひれ伏す恋。

「何言ってるんだよ！・・・体育だよ！？・・・・楽しいじゃないか！」

今までのすべての授業で睡眠を取り、すっかり元気になった奈々がはっちゃける。

「アンタと違ってアタシは繊細なのよ。・・・・病弱な美少女なのよ。」

朝からご飯を三杯も食べ学校に来た女の子のセリフとは思えないが、その事は誰も知らないので問題ないだろう。
そんな恋の言葉に対して色々とツッコミはじめる奈々。そしてそれに応戦する恋。それを描写するまでもなく視点が切り替わる。

「・・・・・・・・次は・・・・・体育なの？」

恋と奈々のやり取りに構わず、せっせと準備をして出て行く女生徒達を見回しながら光樹が梅香に尋ねる。

「はい、そうですよ。」

「僕・・・・体育の時の服とか持ってないんだけど・・・・。」

「そうなんですか？」

「うん・・・・。」

春斗がうっかりしていたのか、光樹は何の用意もしていなかった。

「だったら私のモノを貸してあげます。」

「え？・・・・そんな悪いよ！」

梅香の提案に畏れ多いという感じで声を荒げる。

「この学校は体育の時にジャージとブルマのどちらかを選ぶことが出来るんです。だから私のジャージを貸してあげます。そうすれば万事解決です。・・・・ね？・・・・・良いアイデアでしょ？」

「・・・で、でも・・・・・・。」

かなり申し訳ないので・・・なかなか提案を受け入れることが出来ない光樹。

ガラガラガラ！

「おーい！・・・光樹はいるかぁ！」

そんな中に突如として現れたのがかの御高名な庭乃春斗先生である。

「あ、春お兄ちゃん！」

「おう、お兄ちゃんだぞ。・・・・それよりもお前ら次体育だろ？」

「うん、そうみたいなんだ。・・・でも着替えが・・・・。」

「悪い悪い。今日体育あるのすっかり忘れててな・・・。・・・奈々、今日の体育はなんだ？」

「バスケットボールだよ。」

「そっか、じゃああんまり激しい運動も負担がかかりそうだから見学するか？」

「・・・え・・・・・・・でも・・・・・・・・少しぐらいなら・・・・。」

手術成功から半年間もリハビリを続けたのだ。

激しい運動はまだ辛いかもしれないが、少しぐらいの運動ならば耐えられる自信があった。

「そっか、なら無理しない程度に頑張れよ？・・・じゃあ着替えは・・・・」

「それなら私のジャージを貸して差し上げようと思います。」

「宵里のか？・・・・・良いのか？」

「はい、・・・・困ったときはお互い様です。」

「よし！偉い！・・・・ポイント１０点！！！」

梅香の何かのポイントが１０点加算された。

「あーー！！！・・・・春斗先生！・・・・アタシも！アタシも光樹にジャージを貸します！」

「いや、もう宵里のがあるだろう。」

謎のポイントが加算されているのを見た恋が勢い良く申し出るが、あっさりと断られる。

さすがにジャージを二重に穿くわけにもいかない。

「ええー！・・・・じゃ！・・・じゃあ！・・・・・下着を貸します！・・・・・凄いでしょ！」

確かに凄いことであるが、なかなか下着を貸し借りする機会もないし、下着で受ける授業もない。

「・・・・・まあその心意気は買ってやるか・・・・・・ポイント１０点！」

「よっしゃー！！！」

力の篭ったガッツポーズを魅せる恋。ちなみに何のポイントかは全く分かっていない。
ただ春斗からポイントが貰えることが、何かしらの評価が貰えることが嬉しいのだ。

「二人ともずるいよぉ！・・・・じゃあボクはゲームで進めない所があったら何でも教えてあげるよ！」

負けじと奈々もこのポイント獲得合戦に参加する。

「お前はゲームばっかりやりすぎだ。・・・・・・・ポイントマイナス１０点！（笑）」

「ええーー！！！」

一人だけマイナススタートの奈々。（笑）

「というわけでこの調子でどんどんポイントを稼いでいってくれ。１００ポイント溜まると俺から素敵なプレゼントが貰えるからな。」

「本当ですか！！！」

キラキラと輝く瞳を作りながら春斗を見る恋。
一体どんな素敵なプレゼントを貰えるのだろうか！

「・・・・まあ大それたモノではないけどな。」

「アタシ！頑張ります！」

「そうだな。・・・テストで良い点とっても上がるから頑張れよ。」
「はい！・・・誠心誠意！粉骨砕身！玉砕する覚悟で頑張ります！」
「そうか。でも玉砕はしなくて良いからな？（笑）」
苦笑を漏らしながらポンポンと恋の頭を撫でる春斗。
それにウットリと身を任せる恋。こんな所が彼女を恋心スパイラルに陥れていく。
「奈々もちゃんと勉強してポイントを稼ぐんだぞ？」
「う～～～・・・分かったよぉ。」
渋々と頷く奈々。
「宵里は普通にしてるだけでも優勝候補だからな。でもがんばれよ？」
「はい。」
たおやかに微笑みながら頷く梅香。
「光樹も周りのヤツと仲良くして、勉強頑張れよ？・・・体育も程ほどにがんばれ。」
「うん！ありがとう春お兄ちゃん！」
「よし、元気があって宜しい。光樹には特別サービスで３０ポイントやろう。」

「・・・え？」

「じゃあそういうことで頑張れよ。」

春斗は気楽にそういうと、恋や奈々にズルイと詰め寄られてタジタジとなっている光樹に背を向け教室を出た。
いつでもどこでもトラブルメーカーなヤツである。

更衣室に入った途端、光樹は壮絶な程に顔を赤く染め上げ自分の今の現状を儚んだ。

「・・ぅああ・・・・あ・・・・・ああ・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・あ。（真っ赤）」

目の前では年頃の男の子であれば泣いて喜ぶような光景がひろがっている。

「なにしてんのよ光樹、さっさと着替えるわよ?」

制服をするすると脱ぎだし、あっさりと下着姿になる恋。
恋愛中で自分を磨くことに必死であるのでかなり良いスタイルをしており、
胸も同年代の女の子よりは大きく、お尻もキュッ！となって足も長い。
将来は必ず良い女になることが約束されているような容姿である。

「あ、あ、・・・ご、ごめんなさい！（真っ赤）」

視界に映る恋の下着姿。
がっつりと網膜に映し出してしまったため激しく目を瞑り謝る。

「何言ってんのよ。女同士なんだから気にすることないじゃない。」
オーバーな光樹のリアクションに首をかしげながら更に接近してくる恋。
下着姿の美少女が近づいてくる。それと比例するように光樹はパニックになっていく。
「・・・ほらほら、触ってみ・・・凄いでしょ？アタシの胸。毎日牛乳飲み捲くりだし大きくするための体操だって怠ってないのよ？」
恥ずかしがる光樹を面白がり、その手を自分の胸に持ってくる。
それなりに強く押し付けられた光樹の手によってクニュリと形をかえる恋の胸。
（はぅぅ！・・・や、やわらかいよぉ！・・・ご、ごめんなさい！・・・・ごめんなさい！（真っ赤））
キュッっと目を瞑ったままパニックを繰り広げ続ける光樹。
「光樹の胸はどうなの？・・・・ちょっと触らせてよ。」
女同士では良くあることであろう。気軽にそう言うと恋は光樹の制服越しの胸を触る。
「・・・アンタ、あんまり胸ないわねぇ。・・・まあまだこれからだから気を落とさないように。」
適度にサワサワ弄った後に素直な感想を述べる。
そりゃあ男である光樹にそれなりの膨らみがあっては困るのだから

仕方ない。
その代わりといっては何だが股間の盛り上がりについてはここにいるすべての女子に負けないだろう。

「恋、あまりはしたない事はしないようにね。光樹さんが嫌がりますよ。」

梅香がそっと注意する。
何気に彼女もすでに着替えに入っているようで下着姿である。
キメ細やかな白い肌にスラリとした瑞々しいスタイル。これまた恋同様、中学生にしては大きめの胸をしている。
むしろ恋よりも大きいようだ。もちろん光樹は視界を梅香に合わせないようにしている。・・・恐るべき忍耐力である。

「別に良いじゃない。・・・光樹もイヤじゃないわよね？」

女同士これぐらいのじゃれあいなど日常茶飯事といった感じである。

「は、はい！・・・ご、ごめんなさい！（真っ赤）」

しかし光樹は見た目は女の子（にしかみえない）であるが、中身は立派な男の子である。
こんな事を経験したことが全く無いのでパニックに陥るし、日常茶飯事では困る。

「何で謝るのよ。・・・・・まあ良いわ、さっさと着替えなさいよ。」

「・・・・・はぅ・・・・・・・・・・う、うん。」

さて困った。パニックもまだ落ち着いていないのに更に困難な出来

事が光樹を襲う。
一応女物の下着を着けているのでその点は安心だが、如何せん中身が男物なのである。
胸が全く無くて不審に思われるかもしれない。股間にあるどうしても隠せない膨らみを見られて正体がばれるかもしれない。
絶体絶命のピンチである。

「ああ、そうだ！・・・ボク、ミツキチと話があるから先に行ってて よレン！・・・あとウメッちも。」

危機一髪な状況の光樹に救いの手が差し伸べられる。
声の主はいまだ何も着替えをしないでずっと三人のやり取りを見ていた奈々。

「話？・・・そんなの着替えながら出来るじゃない。」

「お互い積もる話があるんだって。・・・終わったらすぐに行くから先に行っててよ。」

さっき友達になったばかりなのに一体どんな積もる話があるのかは謎だ。
恋ももちろん不審に思ったのだが、いつものアホな奈々の事であるからまたどうしようもなくどうでもいい、
いい加減で無益極まりない無駄なことを思いついたのだろうと思い、

「なら先に行ってるわ。・・・さっさと来るのよ？」

「わかってるって。」

奈々の返事に呼応するようにタイミングよく着替えを終え颯爽と更

衣室を出て行く。

「梅香、行きましょう。」

同じく着替えを終えた梅香を伴って。

「みんないなくなったね。」

奈々の言葉通り更衣室には先ほどまで姦しかった女子生徒の姿は無く。

光樹と奈々の姿しか無かった。お互い未だに制服のままである。

「・・・・そ、それで話って・・・・・・なに？」

絶体絶命の危機を乗り越えた安堵と、奈々がタイミング良く言い出してくれた用事の疑問を抱えた光樹。

首をかしげながら奈々に問いかける。

「ミツキチってさ、・・・今までずっと病気で入院してたんだって？」

「・・・う、うん。・・・・そうだよ？」

「小学校の時も中学校の時も？」

「うん、・・・・病気が重くてずっと学校には行けなかったんだ。小学校の入学式の時に倒れちゃってそれから・・・」

「そうなんだ、嫌なこと聞いてごめんね？」

「あ、ううん！・・・・全然大丈夫だよ！？・・・・・病気は大変だったけど皆が良くしてくれて、不幸だと思ったことはないから。」

「そっか・・・・・そんな風に思えるなんてミツキチってカッコイイね！！！」

「そ、そんなこと無いよ。（赤）」

尊敬の眼差しで自分を見つめる奈々から恥ずかしそうに目を逸らす光樹。

「それでさ！・・・ミツキチがその少しだけ入学した小学校ってどこ？」

「え・・・・・えっと・・・・・・確か・・・・・・・えっと・・・・。」

記憶の中の小学校は当時の激痛の思いの方が強くてすんなりとは出て来ない。

「そこって・・・・・・・萌沢小学校じゃない？」

「あ！そうだ！・・・・・・うん、萌沢小学校だよ！！！」

先程に続いて二度も奈々の絶妙な助け舟に救われる。

「でもどうして・・・・そんなこと知ってるの？」

絶妙な合の手に喜んだのも束の間、何故それを入れれたのかという疑問が光樹の中で生じる。

奈々とは今日会ったばかりだし、小学校の会話をしたのもたった今なのだ。

「ふふふ・・・・実を言うとボクも萌沢小に行ってたんだ。」

何かを確信した様に微笑みを浮かべる奈々。

冷静な表情に戻そうとするのだが、どうしても表情が崩れてしまう。

「え？・・・・・・・・・。」

一瞬、奈々が何を言っているか分からなかった。

だがそれなのに光樹の心はズキリとした緊張と不安の痛みが走る。

「入学式にも出たんだボク。」

「・・・・・・・・・・・・・・。」

「それでね。・・・・横にいた男の子と仲良くなって少し話したんだけど・・・・・その子、入学式の途中で倒れちゃって・・・・。」

「・・・・あ・・・・。」

そういえばおぼろげな幻の様な記憶の中で、隣にいた男の子の様な女の子と仲良く話したような記憶があった。

「凄い心配してたんだけど・・・・ボクも小さかったし、情報も全然無かったからすぐに忘れちゃってた。」

次々と紡がれる奈々の思い出。それに比例するように光樹の顔は青くなってくる。

「その時の子って・・・・・・・・・・ミツキチだよね？」

名探偵が自分に、貴方がやりましたね？という様な声色である。

そこには疑問を投げかけるという意味合いよりも、ほぼ事実である事を確認する為という意味合いの方が強かった。

「・・・・・・・・・・・・ぁ・・・・・・・ぅ・・・・・・・ぅ・・・・・・・。」

絶望に染まる表情。これから訪れる恐怖の断罪に怯え瞳を潤ませる光樹。

しかし、光樹にそれから逃れるために、その問いかけを否定する事は出来なかった。

「ミツキチって・・・・・・・・・・男の子だよね？」

その問いかけは紛れも無い事実であったから・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・男の子だよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぅ・・・・・・ん・・・・・。」

光樹は頷くことしか出来なかったのである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3280a/

（仮）

2010年10月11日00時38分発行